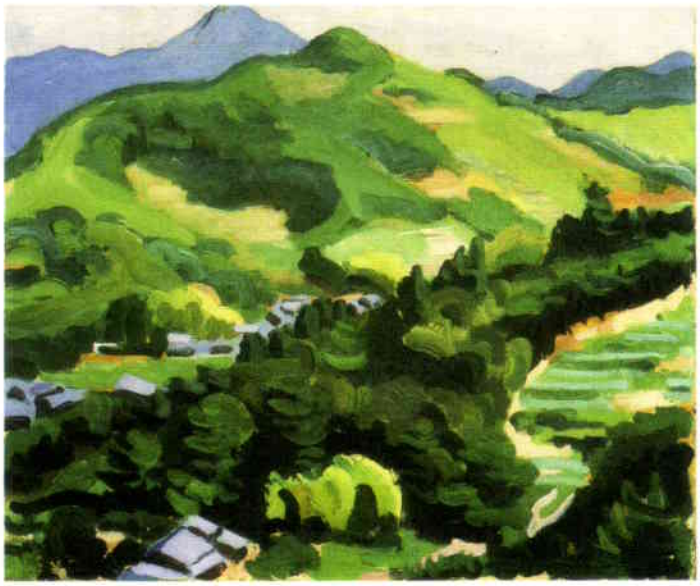
2009年8月1日　第115号発行　【毎偶数月1回1日発行】

市民の意見

発行：市民の意見30の会・東京
NO.115
2009/8/1

発行者の住所：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ケ谷4-29-12-305　TEL:03-3423-0185　FAX:03-3402-3218
郵便振替：00120-9-359506　eメール：iken30@mwb.biglobe.ne.jp　ホームページ：http://www.1.jca.apc.org/iken30
＊隔月刊/購読料・送料とも年2500円、一部400円、65歳以上および身障者の方は年2000円　グリーン会員の方は年1000円



尾田 龍馬「宇和島の風景（上）」
「自画像（左）」（無言館所蔵　作者の経歴は3ページ）

尾田家は芸術一家だった。みんなが絵や音楽を愛した。龍馬もヴァイオリンを弾いた。
そんな龍馬に画家になることをすゝめたのは姉の登美子だった。
戦地に発ってからも、登美子は龍馬に励ましの便りを書き、絵の具を送った。
登美子が早く結婚したのも、少しでも龍馬に絵の具を買ってやりたかったからだった。
死期が近づいた関東州の病院で、龍馬は最後の力をふりしぼって恩ある姉のために芍薬の絵をハンカチに描いた。
遺骨とともに戦地から送られてきたそのハンカチを握りしめ、登美子はただ号泣した。
（窪島誠一郎『無言館を訪ねて　戦没画学生「祈りの絵」第Ⅱ集』講談社刊より）

市民の意見　115号　目次

●帝国の危機の中での「チェンジ」と「政権交代」
どんな争点をだれがつくるか　武藤一羊　4
●特集　若い世代と近現代史教育
歴史を伝える意味――近現代史はいかに教えられているか？　八柏龍紀　8
私たちの世代の歴史感覚　周　婷婷　11
●再び踏みにじられた表現の自由
沖縄アトミックサンシャイン展　小倉利丸　14
天皇題材作品の展示拒否に抗議する　阿部めぐみ　28
●無言館ツアーに参加して
表紙絵作者のご遺族に出会えた！　30
参加者のアンケートから
●運動の現場から
上関原発建設を阻止するために　山戸貞夫　22
意見広告運動第9期スタート　佐藤光子　24
●文化
巻頭詩　鼻のある結論　山之口貘　2
〈原爆〉を伝えることの難しさ　林　次樹　20
自由の行方　連載エッセイ⑫　鈴木一誌　26
映画の紹介『妻の貌』　本野義雄　27
『ふしぎの国のありか』⑳　まつだたえこ　34
●その他
読者のおたより　32
インフォメーション　34
事務局だより　35
会計報告／編集後記　36
◆カット　吉岡セイ
◆題字　安西賢誠

☆８月の読者懇談会のご案内☆
・テーマ「流動する世界、市民の選択」武藤一羊さん（ピープルズ・プラン研究所、本号P4論文参照）
日時：２００９年８月１４日（金）午後６時半　参加費５００円／ピープルズ・プラン研究所（文京区関口１－４４－３信正堂ビル２Ｆ　地下鉄有楽町線江戸川橋駅１－ｂ出口３分　Ｐ１３地図参照　電話：０３－６４２４－５７４８）

鼻のある結論

山之口 貘

ある日
悶々としてゐる鼻の姿を見た
鼻はその両端をおしひろげてはおしたゝんだりして　往復してゐる呼吸を苦しんでゐた
呼吸は熱をおび
はなかべを傷めて往復した
鼻はつひにいきり立ち
身振り口振りもはげしくなって　くんくんと風邪を打ち鳴らした
僕は詩を休み
なんどもなんども洟をかみ
鼻の様子をうかゞひ暮らしてゐるうちに　夜が明けた
あゝ
呼吸するための鼻であるとは言へ
風邪ひくたんびにぐるりの文明を掻き乱し
そこに神の気配を蹴立てゝ
鼻は血みどろに
顔のまんなかにがんばつてゐた

注１　神風号　1937年、新聞社間で長距離飛行記録競争が盛んになる中、朝日新聞社が飛ばした同機が東京～ロンドン間を94時間17分56秒で飛び、熱狂的な反響を呼んだ。

注２　アンドレ・ジイド（1869～1951）　フランスの作家。30年代、ファシズムの圧力に抗する人民戦線政府を支持していたが、ソヴィエト旅行後ソ連の社会主義体制を批判する本を書き、大きな反響を呼んだ。代表作「贋金づくり」「狭き門」など。

またある日
僕は文明をかなしんだ
詩人がどんなに詩人でも　未だに食はねば生きられないほどの
それは非文化的な文明だった
だから僕なんかでも　詩人であるばかりではなくて汲取屋をも兼ねてゐた
僕は来る日も糞を浴び
去(ゆ)く日も糞を浴びてゐた
詩は糞の日々をながめ　立ちのぼる陽炎のやうに汗ばんだ
あゝ
かゝる不潔な生活にも　僕と称する人間がばたついて生きてゐるやうに
ソヴィエット・ロシヤにも
ナチス・ドイツにも
また戦車や神風号（注1）やアンドレ・ジイド（注2）に至るまで
文明のどこにも人間はばたついてゐて
くさいと言ふには既に遅かつた
鼻はもつともらしい物腰をして
生理の伝統をかむり
再び顔のまんなかに立ち上つてゐた

▼ 表紙絵の作者 ▲

尾田　龍馬
（おだ・りょうま）

1919（大正8）年8月29日、愛媛県宇和島市に生まれる。県立宇和島中学校卒業後、1939（昭和14）年4月、東京美術学校油絵科に入学。姉・登美子の援助をうけて学び、1943（昭和18）年9月繰り上げ卒業。同年11月1日、入営。航空第21連隊関東州柳樹屯満州第789部隊に所属。1944（昭和19）年11月10日、関東州柳樹屯にて戦病死。享年25歳。

▼ 詩の作者 ▲

山之口　貘（やまのぐち・ばく、1903～1963）

沖縄・那覇の銀行員の家庭の、7人兄弟姉妹の3男に生まれ、中学生の頃から詩作を始める。1925（大正14）年二度目の上京、書籍発送、暖房器具販売、鍼灸師、ダルマ船助手、汲取り屋、ニキビ・ソバカス薬の通信販売などさまざまな職につきながら詩を書き続け、佐藤春夫、金子光晴らの知己を得る。「鼻のある結論」は1937年、雑誌『改造』に掲載された。

帝国の危機の中での「チェンジ」と「政権交代」

――どんな争点をだれがつくるかが勝負をきめる

武藤 一羊

■オバマの任務は巨人機の不時着

バラク・オバマが「チェンジ」を訴え、米国の建国の精神を呼び覚ます魅力的な弁舌の力で、何百万の草の根のアメリカ人の心を揺り動かし、大方の予想を裏切って当選し、アメリカ大統領に就任してから半年余が過ぎた。オバマ政権が何であるのか、この政権の率いるアメリカはどこへ行こうとしているのかについて分析するのは、この文章の目的ではない。だが、投票直前、フランシス・フクヤマが「オバマの方が（マケインより）帝国の没落をうまく管理できる」としてオバマ支持に踏み切ったことが強い印象に残っている。フランシス・フクヤマは、ソ連の崩壊でリベラル・デモクラシーが最終的に勝利し、それによって「歴史は終焉」したと論じた右派の論客だが、彼のこの言葉はオバマ政権の性格を言い当てていた。アメリカ帝国という巨人機はブッシュ機長による能力を超える機首の上げすぎで失速し墜落寸前の状態に陥っていた。この巨人機を失速から救い、どこかに不時着させるのが、すなわち帝国支配を崩壊から救い出すのが、パイロット席に到達したオバマの任務なのである。

だから私は、オバマ大統領とその政権には少しも幻想を持っていない。だが彼の「チェンジ」の約束が若者を含む大きな草の根のうねりを作り出し、それによって当選を勝ち取ったことはやはり大きい意味を持ち続けていると思う。ヒラリー・クリントンが候補者になっていれば、民主党の伝統的な選挙マシーンは能率的に動いただろう。だがオバマの場合のような予想外の横への自発的な動きは起こらなかっただろう。そのような事情から、またアメリカにとっての危機の深さのせいで、オバマ大統領は戦後の歴代大統領の誰よりも下からの進歩的世論の圧力に影響されやすい大統領になったと言えるだろう。逆に言えばアメリカ国内と国際的な民衆の連携によってアメリカ政府の政策を多少でも変更させる手掛かりとなる隙間が生じていると見るべきだろう。その隙間にテコを差し入れ、政策変更への圧力を――例えば沖縄の基地について――強めるべき状況が生まれているのである。

オバマの「チェンジ」の訴えは、ブッシュ時代に失われたアメリカの威信や指導力を回復しよう――つまり挙国一致でアメリカ帝国を救おう、という「ユニティ」の訴えとセットになっていて、逆にアメリカ国民の帝国意識を煽る力を持っていた。とはいえ、オバマ政権は、ブッシュ政権と明確な一線を画することで誕生したのである。先制攻撃の正当化とイラク戦争は否定され、世界的孤立を招いた一方的行動主義は放棄され、国際協調と「敵とも対話する」路線に転換する。グアンタナモの収容所の閉鎖が約束された。大金持ちを超・超大金持ちにすることが国益を増進するという式の経済・財政政策は否定された。オバマ政権は「テロとの戦争」という用語を静かに引っ込め、過激主義者との闘いという言葉に差し替えた。「テロとの戦争」が続けられる限り、アメリカは戦時国家、大統領は戦時大統領だからである。だがその一方、「テロとの戦争」の終結も宣言されず、アフガニスタンでは米軍の大量増派による軍事解決が追求されている。オバマにとってこれは致命的な選択になる確率が高い。アメリカ

帝国「中興の祖」を期待されているオバマが、立て直しに成功するかどうか行き先はひどく不透明である。

■「チェンジ」と似て非なる政権交代

さて日本である。オバマ政権の誕生は、ブッシュ共和党政権にしがみついてきた日本政府にとって、屋根に登って梯子を外されたにも等しい出来事だった。だが米国での変化を待つまでもなく、ブッシュの没落とオバマの台頭を招いた同じ状況変化は、自民党の支配体制の根本をぐらぐらに揺すぶっていたのである。危機状況への応答がアメリカではオバマの「チェンジ」だったとすれば、日本でのその対応物は「政権交代」という叫びである。50年を越す自民党支配を終わらせ、民主党を中心とした政権をつくるという話である。だがマスコミを賑わし、当事者によっても高唱されている「政権交代」は、どうもオバマの「チェンジ」とは似て非なるものではないかと思われるのである。なぜならこの「政権交代」が日本政治の何から何への交代を意味するかが一向にはっきりせず、衆議院選挙を目前に、いわゆる「政局」についてどうでもいい話題が洪水のように提供されながら、当事者からさえ明確な争点が提起されていないからだ。最近のBS放送の番組で、民主党の岡田幹事長が、来るべき選挙の最大の争点は何かときかれて、「政権交代そのものが最大の争点だ」と真顔で答えていた。

これはいったい何であろうか。催眠術に長けていた小泉が去ってみると、有権者の信任を受けずに次々に首相の座についた安倍、福田、麻生は、ことごとく民衆の信頼を失い、自公政権が破たんしたことは誰の目にも明らかになった。その破たんした自公政権とは何だったのか、その何が批判され、断罪されるべきなのか。

野党が「政権交代」の必要を説くとするなら、まずこの自公政権がどのような基本政策や行為で国を誤らせたのか、責任ある判断を明らかにすることが必要だ。そしてそうした政策や行為に終止符を打ち、その代わりに自分たちの政策を打ち出すのが当然だろう。だがそのような議論は、「政局」議論のから騒ぎの中で少しも聞こえてこない。いや聞こえてこないのではなくて、もともと政治世界では行われていないのではないだろうか。7月7日現在、選挙の日取りについての大騒ぎにもかかわらず、選挙公約であるはずの「マニフェスト」は、自民党からも民主党からもまだ出ていない。公約は原則的問題ではなく、人気取りと党内調整の産物という位置づけしかないかのようなのだ。

■自公政権が犯した三つの誤り

政権交代を目指す野党勢力は、最低限ブッシュ政権期に、自公政権が犯した明白な誤りから手を切らなければならない。それらは、部分的な失政や誤りではなく、日本列島社会の在り方にかかわることがらだからである。以下のような誤りである。

（一）〈日米同盟〉ブッシュ政権の「反テロ」戦争、とくにイラク侵略戦争への無条件支持と、「日米同盟―未来のための変革と再編」の取り決めのもとに、沖縄を国内植民地として扱いつつ、日本の米軍指揮下への完全統合を推進し、憲法を無視して、インド洋、イラクに派兵したこと。

（二）〈右翼の支配〉日本帝国を美化する極右勢力が政権を支配し、この流れが社会的に主流化することを陰に陽に支えてきたこと。その下で歴史の捻じ曲げ、アジアとの関係の悪化、とくに北朝鮮と在日朝鮮人への排外主義的扇動、女性の権利へのバックラッシュ、教育の国家支配、海外派兵の日常化による軍事力のその総仕上げとしての強引な明文改憲へのドライブが進められてきたのである。

（三）〈小泉「改革」〉資本の利益と競争を至上命題にするネオリベラル「改革」とグローバル化によって「公共」を解体して私営化（民営化）し、労働者の権利を否定する財界提案の労働法制を垂れ流し的に政策化し、格差の拡大と地域の空洞化と社会の荒廃を招き、弱者を切り捨て、労働を使い捨てることを当然視する風潮を定着させたこと。

オバマの「チェンジ」に見合う変化が日本に起るとすれば、それは最低限、右の三項目について自公政権の既成事実を取り消し、責任を問い、別の路線で置き換えなければなるまい。それは次のような方向をもつ路線であろう。（一）小泉政権以来なされた対米軍事取り決めの再検討に向けて再交渉を開始し、（二）日本帝国の戦争と侵略を正当化する言説への国家の加担を一切やめ、戦後補償の要求にこたえ、改憲を行わないことを宣言しつつ、憲法の前文および九条の実現に向けて積極的にとりくみ、（三）格差を減らし、地方と農業を復興させ、労働の権利を再確立し、すべての住民の平和的生存権を保障し、下から大資本を規制する体系的プログラムを実施する。

これらは日本社会を革命的に変えるような大層な提案ではない。むしろ米国におけるブッシュからオバマへの変化、すなわちかの「チェンジ」の幅に相当するくらいの微温的といえる提案である。つまり普通に考えれば、二大政党間の「政権交代」でこなすことを期待できるはずの変化である。例えばブッシュの戦争が誤りであったことがアメリカ政府によって認められているとき、その戦争を支持したことも誤りであったと認め、それが正しいとして行われた行動、政策、立法もまた誤りであったとすることは、当たり前ではないか。

■真の問題を回避する民主党

自民党が当たり前のことを認められないのは仕方ない。自分でやったことだからである。しかしその自民党にとって代わろうとする民主党は、上記の3項目について、オバマのブッシュ批判の程度でも、立場や原則を明確にしているか。ことごとくあいまいである。自民党との違いを見せるために対米軍事協力についてなにがしかのことは口にする。だが普天間基地の無条件閉鎖や辺野古新基地建設の撤回や地位協定の改定やについて米国との交渉を本気で行なうつもりかどうか、それは未知数である。肝心の改憲については、党首の鳩山由紀夫は『新憲法試案』という著書まである明確な改憲論者で、自衛軍や集団安全保障を憲法に書き込めと提案している人物である。今年の3月、鳩山氏はメールマガジンで「早く政権交代を実現させ、憲法の論議も可能になるような安定政局をつくりださなければなりません」と述べていたと、『しんぶん赤旗』は報じていた（3・13）。民主党はその成り立ちからして、旧社会党の護憲論者から、核武装の提唱者、軍産複合体の代弁者、「靖国派」右翼までを含むたいへん幅広い政党であることはよく知られている。民主党に担ぎ出されて静岡県知事に当選した川勝平太ははっきりした右翼知識人の一人である。川勝は「安倍内閣では教育再生会議の分科会主査や『美しい国づくり』企画会議の委員などを務め、有識者メンバーとして国政にかかわった。〈新しい歴史教科書をつくる会〉の賛同者にも名を連ねている」という（産経ニュース、7月5日）。

民主党とはこういう党であるから、真の問題を回避するしかない。そこで、「政権交代」そのものが最大の争点ということになるのだ。そして、本当の争点の代わりに登場させられたのが「官僚政治の打破」、「霞が関打倒」、「地方分権」などというスローガンなのである。自民党の地盤沈下に悪乗りして、「地方分権」を旗印に、自分を総裁候補にしてくれれば自民党から立候補してあげよう、などと言いだすピエロのような人物も現れ、ピエロでもお客が入りさえすればいいか、とそれに乗るそぶりを見せる選対責任者も出てきて、その掛け合い漫才風のやりとりをマスコミが面白く伝える。ここで言われている「地方分権」は、中央政府と県知事の予算と権限の配分をめぐる権力闘争で、住民自治や民主主義の活発化とはまったく関係ない話なのだ。

真の争点はこうして騒音で耳から遮断され、迷彩で目から隠され、そのうえでニセの争点、あるいはたかだか真の争点の尻尾か切れっぱしが有権者の群れに投げ与えられる。そういう風に事態は進行している。

提供・グローカル工人社

■争点をつくる力を取り戻そう

どうすればいいのか。簡単なことである。争点をつくる力を列島住民の側に取り戻せばいいのである。争点をどちらが作るのかが勝負を決める。名前をつけたり議題を設定したり日程を決めたりすることは一つの権力の行使である。マスコミと政党がその権力を勝手に行使しているのが現状なのだ。その力を列島住民の方にとりもどすことが必要だ。

そんなことができるだろうか。できる、というよりすでにそのような力を民衆側は部分的にだが行使してきているのである。昨年末の「派遣村」で東京のど真ん中に出現したのはそのような力であった。それは、「派遣切り」の不正義を明るみに出し、派遣労働をはじめとする「不正規雇用」を社会問題化し、それへのなにがしかの「対策」を講じることを、あの大企業べったりの自民党や本工組合である連合に支持される民主党にさえ強いたのである。沖縄での「集団自決」への軍の強制記述を削除した日本政府の教科書検定に抗議する沖縄の人びとの決起がこの問題を第一級の政治課題に押し上げた2007年のことを想起しよう。ここでは政治の議題は民衆の運動によって設定され、権力はその議題に沿って対応を迫られる。そして個々の政治家はそれに沿って態度を問われ、審査される。

だがいま、支配的体制の腐敗は手に負えないものとなり、対決は、個別課題のレベルを越えて、政権選択という領域に突き進んできたのである。だから個別の争点だけではなく、それらをつなぐ総合的な民衆側の議題をつくりだす自主的なプロセスが必要なのである。政治家に期待をかけたり、お願いしたりするのではなく、また政党の動向に振り回されたり、「政権交代」に参入してミイラとりがミイラになるのではなく、民衆がドンとかまえて、自分たちの議題に照らして、政党や個々の政治家の意見と行動を審査することが必要であろう。そしてその審査に照らして、よりましな側に投票することが必要だろう。私は審査の基準として、三項目を挙げてみた。いろいろな審査の基準があるはずである。それらが持ち寄られ、突きあわされ、相互に関連させられれば、おのずと厚く重なり合う部分が生じてくるだろう。それが民衆の側の議題設定となるだろう。

迫りつつある総選挙によって民主党中心の「政権交代」が実現する可能性は高い。しかしそれは終着点ではなく、いま自民党や民主党を名乗っているさまざまな政治潮流の新たな離合集散の始まりとなるだろう。そのなかで社民党や共産党や無所属勢力はどう動くだろうか。そのとき、議会から独立に大きな原則的な議題を共有する横につながった民衆の存在が、強い磁場をつくっているかどうか、それが次の時代をきめるだろう。そのような磁場のなかではじめて、異質な潮流の寄り合い所帯ではない、原則にしたがった「政界再編」が起こりうるのである。ここ10年、淀み腐っていたかに見えた事態が大きく流動し始めたことは、まぎれもなく歓迎すべき事実なのだ。いたるところから行動を起こして、この流動に新しい水路をつくろう。（7月8日記）

（むとう・いちよう、ピープルズ・プラン研究所運営委員）

◆武藤一羊さんを囲む読者懇談会のお知らせは13頁参照。

特集　若い世代と近現代史教育

日本の歴史教育は、戦前・戦後を通じて、政治権力の関与・介入によって著しい影響を蒙ってきた。80年代以降に限っても、「あたらしい教科書をつくる会」等に代表される右翼排外主義グループと、一部マスメディア、文教族議員らによる（とりわけ近・現代史教育に対する）介入は、目に余るものがある。

その一方で、若い世代の歴史離れ、歴史への無関心が取り沙汰される。それが事実とすれば、何に起因するのだろうか。教育現場では、何が進行しているのか。歴史を教える教員と、教わる立場の学生の発言を紹介する。

歴史を伝える意味

―「近現代史」はいかに教えられているか？―

八柏　龍紀

＊歴史を語ること＊

地図の上　朝鮮国に黒々と
墨を塗りつつ　秋風を聴く

この短歌は、よく知られている石川啄木のものです。代用教員をしたことのある啄木が、1910年8月の韓国併合に、そのイメージを重ね合わせて詠ったものだと思われます。大韓はこの年に日本帝国に併合され、李氏朝鮮以来の王朝の歴史を閉じることになりました。

ちなみに李氏朝鮮の建国は1392年のことでした。当時、朝鮮の高麗王国は激しい倭寇の侵略を受け、そのため衰退します。しかし、そのとき高麗の武将だった李成桂が一臂を奮い、倭寇侵攻を撃退して、打ち立てた国が李氏朝鮮でした。日本では明徳3年、ちょうど室町幕府第三代将軍足利義満の治世でした。李氏朝鮮はそれから約600年あまりの歴史を経て、皮肉なことに、今度は逆に朝鮮が「倭」といって蔑んでいた日本帝国に併合されることになりました・・・。

こんなふうに、いわば歴史とは、一つの「語り」からはじまるものだと思います。そして、そのことは古代における叙事詩をはじめ歴史物語の通例だったと思います。いかに歴史を語るか。そのことは歴史を語る者にとって、表現にとどまらず、もっとも重要な思想的営為を明らかにすることでした。そこにどういった意図や意識が含まれているのか。そのことは、同時にこれまでの幾たびか繰り返された歴史論争の発端となってきました。

歴史家ハーバート・ノーマンは、その著書『クリオの顔』でつぎのようなことを述べています。

最終的審判などというものはないということ、すぐれた歴史学者のあいだで証拠資料の解釈に食い違いがあるという事実は、もって歴史の複雑性に対するわれわれの認識を深め、われわれの歴史判断が独断的狂信的になるのを防ぐべき事柄である。われわれはいろいろ違った歴史学説を満遍なく調べ、深く考え、たえずさぐることによって、かたよらない、そしておそらく結局のところ賢明でさえある見解に到達することができるのである。

（岩波文庫　1997年第5刷）

そして、ノーマンは、ソクラテスとベーコンの言葉を引用して、歴史において「意見の衝突から真理が生まれる」のであって、

それだからこそ、「歴史は人間を利巧にする」のだ、と結んでいます。

これを言い換えるなら、歴史を語る者は、つねに自らの生きた歴史のなかで自らの言説が批判され、それとともに深い思索を余儀なくされ、試されている、ということだと思います。それは歴史を語る者の宿命でもあります。

＊近現代史は教えられないのか？＊

ところで、ここ20年ぐらいの傾向ですが、日本の「近代・現代」の歴史が中学校や高等学校で扱われないということは、ほとんどなくなったように思います。理由は、近現代史が、高校や大学などの難関校の入学試験の問題に頻出するためだからだと思います。

入学試験とは、難関校にとって、いわば「落とすための」試験ですから、むしろ高等学校などで手が回らない未修学部分をどんどん出題することで、点数に差がつきやすく合否判定がしやすくなるという思惑があるからだと思います。それとまた、近現代史は現在の社会との関わりが実に濃密ですから、できるだけ積極的な問題意識をもった高校生がほしい大学側などでは、この分野を中心的に出題し、受験生の問題意識を探りたい狙いがあるようにも思えます。

そんなわけで、たしかにいまどきの高校生、とくに難関大学への受験を志す者の多くにとって近現代史の知識は必須の学力とされ、なかにはむしろ近現代史が得意であると自己申告する若者も、以前よりは多くなったように思います。しかし、その知識の質や内容について考えてみると、学習することの意味に、なにか腑に落ちないものをわたし自身感じることがよくあります。その感覚は、つぎに述べることにも関わる問題です。

戦時中の入学試験の面接試験の問題などをみると、「八紘一宇とはなにか？」とか、「日本に生まれた幸せは何か？」などが出題され、そのために当時の受験生は、さまざまな受験対策を考えていたようです。

当時、中学受験を目前にしていた映画評論家の佐藤忠男は、「日本に生まれた幸せは何か？」と聞かれ、いろいろと考えた結果、いろんな答えがありすぎて、結局は返答に窮し答えられなかった体験談を『草の根軍国主義』（平凡社　２００７年）に記しています。そうして答えられずにいると、何人目かに指名された生徒が、じつにさわやかにニッコリ笑って、「万世一系の天皇をいただいているからであります」と答え、実はこれが正解で、それは受験参考書に書いてあったに違いないと述べています。

いわば、受験は要領よく知識を蓄えて合格できればいいわけで、その内容まで、あるいは知識の質まで問う必要はありません。これは現在における中学や高校で近現代史をいくら扱っても、それによる青少年の近現代史における感性や意識の育成につながりえないという現実を、どこかで示しているような気がしてなりません。

実際のところ、受験では知識をいかに有効に詰め込むかが重要であり、「なぜ？」という発問をしていたのでは、試験問題をこなすには時間がありません。結局、歴史の問題では、歴史的な「意味」を問うのではなく、上滑りの「知識」を問うものという限界がはじめから策定されているのです。

よくいまの若者は、12月8日、8月6日、9日、そして8月15日が何の日か知らない。朝鮮半島がかつて日本の植民地だったことも、そこでは創氏改名や慰安婦として兵隊の慰みものになった女性の悲惨さも知ってはいないし、無関心だ。中国での侵略の惨さ、三光作戦といい、焼き尽くし殺しつくし奪いつくすといった戦争犯罪の実態、南京虐殺事件も知らない。歴史では何を教えているのか。いったいどうしたことか？という戦争体験者をはじめとする多くの方々の声はよく耳にします。

しかし、おそらく戦争に関するそれらの「事実」は、ほとんど中学や高校の日本史授業で教えられていると思いますし、多くの教科書にも、そういった記載はなされています。問題の所在は、むしろ、どうしてそうした知識が抜け落ちるのか、にあるように思えます。

かつて丸山眞男が『「文明論之概略」を読む』(岩波新書　1986年)のなかで、古典でも何でも「俺も昔は読んだものだ」という一過性現象で知識が閉じてしまうひ弱さ、言い換えるなら、知識が個人にあって「血肉化」せず、外化される問題を指摘していました。いわば、ここでの問題は、知識がその人の内面を豊かにし、その人の生き方までに関わるのではなく、皮相的に摂取しては捨て去られていくことにあります。

たしかにわたしたちの周りを見まわして、たまに大学時代の同級生などと会って、昔の勉強のことなどが話題に出ると、「やった、やった……。そういえば熱中して読んでいたな」といった懐古談に終わることがよくあります。

ましてや要領よく知識をつめ込み、そのためには「八紘一宇」だろうが「南京虐殺事件」だろうが、事実関係を暗記して試験に備えようとする若者には、その知識の質については、まったく関心のおよばないことになってしまうのではないのか、と思わざるをえません。

あるいは受験勉強などと関係のない高校生には、それらの知識が必要とされる意味や意義を教師が語ってくれない以上、現在の自分に直接的に関係しない知識は、「学校」がカリキュラムや単位という圧力で押しつける苦痛以外なにものでもありません。心に刻む意味を、伝える側、教える側がいかに考え、表現できるか。問題はその思想地点にあります。

＊何を教えるかの意味＊

最近わたしは高校教師の研修会に招かれ、教師の生の授業に参加させてもらい、発言を求められたりします。たしかに熱心な先生たちの授業能力は、「教師でも」または「教師しか」という意味の「デモシカ」教師と揶揄された時代だったころと比べ、技術的にも、また生徒の興味関心を引き付ける意味でも、かなり熟練し様変わりしたように思います。

しかし、そうした授業を見て思うことは、「先生はこのテーマで、いったい何を生徒に伝えたいのですか?」ということだったりします。授業はうまく構成されていますが、先生は何を伝えたいのか?　あるいは生徒の心に届く言葉を持つべく努力しているのか。

歴史には、つねに「なぜ?」という発問がつきものだとわたしは思います。なぜこの事件が起き、なぜ人は死なければならなかったのか?　生徒を前にして、わたしたちが伝えるべきは、歴史事項の羅列や歴史的人物をおもしろおかしくした知識ではないように思います。語る側の意思や視座を明確にして、さらにさまざまな批判も含み込むようにして、それでも伝えたいという意識、いわばいま何かに必要であるというのではなしに、未来につながるものとしての歴史意識がそこに求められているのではないか。

たしかに近衛文麿がどんな政策を行って、どんな結果を招いたか、そうした歴史的な知識の整理は必要でしょう。しかし、なぜ?　どうして?　彼はそれを行ない、どうしてそれを止めえなかったのか?　昭和天皇は、平和主義者と言われるが、なぜ開戦の詔勅を発し、戦局が不利になっても戦争を止めえなかったのか?　多くの人びとが、昭和天皇の名のもとに戦場に送られ、無駄な死を死に、中国では日本軍の不法な暴力によって2千万近くの人びとが亡くなったというのに、なぜ?　さらに、いつかの時代に君は戦場に立つのか?　立たないとして、それをどうするのか?

歴史を語ること、それはノーマンの言葉を敷衍するなら、「真理」への探求であるように思います。けっして知識の伝達ではなく、そこで何を感じ、そのとき生まれた感情や深遠な意味を、いかに考えるのかにかかっているのだと思います。

歴史への「問い」を失ったところに時代がむかっているのだとしたら、そこにこそ危機が潜んでいる。わたしが、歴史教師としておく座標軸は、つねにそこにあります。

(やがしわ・たつのり、予備校教員)

私たちの世代の歴史感覚

周　婷婷

私は、中国で生まれ、父の仕事の関係で4歳の時に日本に来た。以来、約16年間日本で生活し、日本の教育を受けてきた。ご承知の通り、日本と中国は日中戦争において侵略した国と侵略された国という関係にある。そのような関係にある両国は度たび、歴史認識の違いから様ざまな問題を顕在化させている。例えば、歴史教科書問題、靖国神社参拝問題、反日・反中問題などである。

このような問題が起こるたびに、「中国人」である私と「日本で育った」私との間では葛藤があった。というのも、これまで私は、小学校、中学校、高校と日本の視点から、日中戦争や太平洋戦争を学んできた。その分、「日本人」としての歴史感覚を持っている。しかしその半面、「中国人」としての歴史感覚も持ち合わせているからである。だから日中間で歴史認識をめぐる問題が起こるたびに、いつも「『国籍』という壁は乗り越えることができないのか、『歴史認識』の差異はどうしたら克服できるのか」と思わざるを得ないのである。

ただ恐ろしかった広島平和資料館

私は日本に来て、4歳から9歳まで広島に住んでいた。私が初めて戦争についての話を聞いたり、資料を見たりしたのは小学校2年生の時であった。その当時、外国人向けの広島ツアーがあり、私はそれに父と一緒に参加した。その行先の一つが広島平和記念資料館であった。その時は、展示されたボロボロになった衣服や鞄、亡くなった方の爪の一部、原爆の中を逃げる人びとの模型などを見て、ただただ怖いと思うだけであったのを覚えている。それは戦争だからとか、原爆だから怖いというわけではなく、純粋に今まで見たことがないもの、それも普段ではおそらく目にしないであろう恐ろしいものを見たという怖さだったと思う。その後、9歳から静岡に住んだ。小学校5、6年生になって初めて社会科で第2次世界大戦について勉強した。そこでは、太平洋戦争のことはもちろん、日中戦争についても簡単ではあったが勉強した。具体的には、太平洋戦争についてのビデオや資料を見た。私はその時に、太平洋戦争や広島、長崎への原爆投下での被害者の多さや、その悲惨さに衝撃を受けた。日中戦争については、南京大虐殺のことが触れられていた。しかしながら、実際にどのようなことが行なわれていたのか、なぜ日中戦争が起きたのかまでは、触れられることはなかった。ただ、私は両親から日中戦争について少し聞いていたので、他の同級生に比べると知識は少しあっただろう。

第2次世界大戦の勉強の後で、担任の先生は私たちにそれぞれ戦争について思ったことを発表する時間を与えてくれた。同級生のほとんどは、「戦争は怖い」や「戦争は悲しい」、「多くの人が死ぬからもうしてはいけない」、「原爆は絶対に使ってはいけない」などのようなことを発表していた。私ももちろん、同じような気持ちであった。しかし、そのような気持ちがある一方で、日中戦争で多くの中国人が日本人によって殺されたんだというある種の被害者意識のようなものが頭にあり、そのことを言おうとしたが、結局言うことができなかったのである。それは、周りにそのことを言った同級生がいなかったために、言い出すことができなかったのである。ただし他の人と違うことを言うのが怖かったというよりは、自分が中国人で周りが全て日本人であった状況がそうさせたのであろう。この時の私の気持ちはおそらく、同じような立場に立った者にしかわからないかもしれない。とに

かくこの当時の私は、戦争について被害者意識のようなものを抱いていた。

意識が変わった沖縄修学旅行

中学時代に、私の持っている戦争に対する意識は変わった。それは、中学3年生の時に沖縄に修学旅行に行ったことがきっかけであった。私たちの修学旅行には「本物の平和学習」という題がついていた。沖縄は、今でこそ観光地というイメージが強いが、太平洋戦争においてアメリカ軍が上陸した地であった。そのような場所に足を踏み入れるのに、そこがどのような場所なのか、どのような歴史をもった人びとが暮らしているのか知らずに行くことはできないという思いから、私たちの修学旅行は「本物の平和学習」となったのである。

私たちは修学旅行の事前学習において、沖縄戦やひめゆり学徒隊についてのドキュメンタリーや映画を見たり、グループごとに分かれて沖縄戦について調べた。その学習の中で、私たちは残酷な事実を目の当たりにした。例えば、日本軍が総力戦を実施し、多くの県民が戦闘に巻き込まれたこと、降伏が許されず集団自決が強要されたこと、日本軍による県民への虐待、ひめゆり学徒隊の方々のことなどである。中でも、学徒看護隊として戦地に駆り出され、亡くなっていったひめゆり学徒隊をはじめとする多くの女学生については、年齢が近い分どうしても他人事とは思えなかった。さらに、修学旅行の3日目にはひめゆり平和祈念資料館を訪れることになっており、そこで「平和集会」を開くことになっていた。私たちはその「平和集会」で亡き学徒隊の方々に捧げる歌「別れの曲（うた）」も練習していた。この曲は、1945（昭和20）年にその年の沖縄師範学校と県立第一高等女学校の卒業生のために作詞作曲されたものであった。しかしながら、卒業を目前に彼女たちはひめゆり学徒隊として戦地に行かなければならなくなり、結局この曲を卒業式で歌うことができなかったのである。

こうした事前学習や「別れの曲」の練習を経て、私たちはいよいよ沖縄の地に足を踏み入れた。でも、私の心の中ではどこか、自分は中国人なのにこのままひめゆりの塔に行っていいのかというためらいの思いがあった。そして、その思いのまま、ひめゆり平和祈念資料館を訪れたのである。

資料館では、学徒隊に関するさまざまな展示があったが、特に心に残ったのは、犠牲となった女学生一人ひとりの遺影であった。皆、本当に私と変わらない普通の学生であったにもかかわらず、命を落としていったのである。中には写真が一枚も残っておらず、遺影がない方もいた。亡くなられた方一人一人の顔を見ていると、胸が締め付けられるような思いがした。

そして、資料館見学後の「平和集会」で、ひめゆり学徒隊生き残りの方から生（なま）のお話を聞くことができた。事前学習で勉強はしていたが、実際にお話を聞くとよりリアリティーを感じた。中でも印象に残ったのは、集団自決についての話であった。学徒隊の方々は皆、絶対に降伏してはいけない、降伏する者は非国民であると教え込まれていた。戦火の中を逃げていく中で、何度も自決しようと考えたという。しかし、たとえ非国民になったとしても、どうしても「生きたい」、「生きてもう一度家族に会いたい」という思いが勝ったのだという。

「平和集会」の最後に私たちはあの「別れの曲」を歌った。ひめゆり学徒隊の生き残りの方々も一緒になってその歌を口ずさんでくださり、歌っているときに自然と涙がこぼれた。この瞬間、私は自分が何国人であるかなど関係なく、一人の人間として他の多くの同級生やひめゆりの生き残りの方々と同じように、心の底から学徒隊の方々の死を悲しみ、平和を願ったのだと思う。

私の中の被害者意識をなくすには

修学旅行におけるこの経験は私の意識に変化をもたらした。今まで日本で戦争について勉強してきた中で、自分が「他の同級生とは違うのだ」という気持ちがあった。日中戦争で、中国は日本に侵略された国だから「被害者」なのだという意識を心のど

こかで抱いていた。しかし、修学旅行でひめゆりの塔を訪れ、様ざまなお話を聞き、「別れの曲」を歌って、本当に心から他の同級生やひめゆり学徒隊生き残りの方々と、純粋に「平和」を願う気持ちを共有することができた。私の中では被害者意識というものが少し薄れたように思う。「戦争」によって命が奪われることに中国人も日本人も関係ない、同じように悲しいことなのだと思うようになったのである。

ただ、私の被害者意識というのは完全になくなることはないだろう。なぜなら、満州事変から日中戦争にかけて日本が行なってきたことは、消し去ることができない事実であるからだ。だからこそ、日本では沖縄戦や原爆投下、太平洋戦争について学ぶのと同じくらい真剣に、もっとたくさん満州事変や日中戦争についても学んでほしいと思うようになった。日本では、どうしても太平洋戦争について勉強することが多くなってしまう。それはもちろん日本人として重要なことであるが、日中戦争で日本国がどのようなことを行なってきたか理解せずに太平洋戦争を勉強して「平和」について語ることは、「平和」の重みを軽くしてしまうことになるのではないのか。残念ながら、私の中学校でも満州事変や日中戦争について十分に学んだとは言えない。そういう意味で、私たちの「平和学習」は「本物」ということはできないのかもしれない。

また、中国でも自分たちの国家で起こったことだけでなく、日本でどういうことがあったのか知る必要がある。そうすることで、私のように中国人の中に深く根付いた被害者意識を薄れさせてくれるのではないだろうか。そして、その深い被害者意識と日本の日中戦争についての無関心が、今日の日中間の諸々の問題の一因になっているように思われる。

「戦争」では多くの人びとが犠牲となる。それは国籍に関係なく、悲しいことであり、繰り返されるべきことではない。そのためにも、自分の国以外の戦争の歴史も知る必要がある。敵同士であった国はなおさらであろう。

あるショックな出来事

先日、アルバイトをしている時にとてもショックなことがあった。私は塾講師のアルバイトをしているのだが、ちょうど中学生に第2次世界大戦の講義をした。学校ではすでに勉強している範囲であるにもかかわらず、驚いたことに、その子はそれについてほとんど知識がなかったのだ。学校では、穴埋め形式のプリントで重要語句を確認しただけだったという。他の国の歴史はもちろん、自分の国の歴史もよく理解していないその子をみて本当に残念で、気の毒に思った。私とはそれほど年が離れているわけではないのに、こうして徐々に戦争について関心を持たない、知らない子供たちが増えていくことにとても不安を感じる。

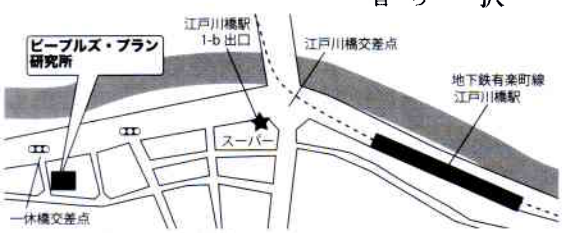
（しゅう・ていてい、青山学院大学3年、国際法専攻）

●武藤一羊さんを囲む読者懇談会のお知らせ

＊テーマ
流動する世界と市民の選択

かってない状況下で、私たちはどういう道を選ぶべきか。皆で議論しましょう。

日時　8月14日（金）18時30分～
参加費　500円
会場　ピープルズ・プラン研究所
（地下鉄有楽町線江戸川橋駅1-b出口徒歩3分）



文京区関口 1-44-3 信生堂ビル 2F
03-6424-5748

沖縄アトミックサンシャイン展 天皇題材作品の展示拒否に抗議する

小倉 利丸

沖縄県立博物館・美術館（以下「沖縄県美」と略記）が主催する「アトミックサンシャインの中へ in 沖縄――日本国平和憲法第9条下における戦後美術」（4月11日から5月17日まで）に展示予定だった大浦信行の昭和天皇を題材にした版画作品『遠近を抱えて』が、沖縄県美館長の一方的な判断によって、企画段階で展示中止にされるという事件が起きた。この事件は、現在の日本が未だに天皇に対する特別な神聖視を免れていないという大変重要な問題を露呈させた。しかも、このことが、沖縄の公立美術館で起きた出来事であるという点は、市民的自由の権利としての検閲や表現の自由という問題が実は「表現」を超えた政治の権力や歴史の認識に触れる大きな問題に通じるものがあるということを示している。

アトミックサンシャインin沖縄展とは

このアトミックサンシャイン展は、昨年ニューヨークと東京で開催されてきた同名の展覧会の沖縄での開催にあたるもの。展覧会は沖縄県美主催だが、企画そのものは、外部のキュレータで昨年の2回の展覧会を企画した渡辺真也が提案したものだ。渡辺によれば、企画の趣旨は「戦後の国民・国家形成の根幹を担った平和憲法と、それに反応した日本の戦後美術を検証する試み」とされ、「9条を持つことで日本は直接交戦から回避することに成功したが、日本の実質的戦争協力は、第9条が保持される限り、ねじれた状況を生み出し続ける。この日本の特異な磁場から、多くのアーティストたちは取り組むべき新たな課題を発見し、彼らの芸術に表現してきた。／日本の戦後やアイデンティティ問題などをテーマとした美術作品の中には、戦後の問題、アイデンティティ問題、また憲法第9条や世界平和をテーマとしたものが少なくない」（同展のオフィシャルホームページより）というものだ。したがって、今回の展覧会は、キュレータによって、複数の作家の作品群をひとつのまとまりのある全体として構成することを意図したものと解釈されるべきものであって、作品の選定は渡辺によるものであり、『遠近を抱えて』を企画に盛り込んだのにはそれなりの意図があってのことであろう。

この展覧会のニューヨーク展での図録によれば、出品作家は、以下の人びとである。ヴァネッサ・アルベリー、アローラ・カルザディーラ、江沢考太、エリック・ヴァン・ホーヴ、松沢宥、森村泰昌、オノ・ヨーコ、下道基行、照屋勇賢、柳幸典である。沖縄展では、これらにさらに沖縄の作家たちが加わった。元々の展覧会でも照屋は沖縄出身のアーティストであるが、かれに加えて、新垣安雄、安次峰金正、比嘉豊光、石川真生、真喜志勉、仲里安広、山城知佳子、平良孝七の作品が出品された。そして、沖縄における展覧会に寄せて、渡辺は次のようにその特別な意義を述べている。

「沖縄を知らない私が、沖縄で一体何ができるのだろうか？　第2次大戦中、地上戦により一般市民の多くが犠牲となった沖縄。戦争体験、さらに27年間の米軍支配を経験し、住民の多くが強く平和を希求するこの地、沖縄。この沖縄という場所に生まれたアーティストたちは、〈戦後〉と呼ばれる時代に、9条という理想、そして沖縄の帰属やアイデンティティというテーマのもとで、どんな表現を行なってきたのだろうか。（中略）私は、これらの戦後の美術作品とその表現を提示することが、9条と戦後美術というテーマを、沖縄県民、そして日本国民、さらに世界の人達と共有し、さらに再考する機会となり、来るべき未来を準備する契機となれば、と願う」（沖縄展の図録より。改行は省略した）。

渡辺は沖縄という場への自らの無知を率直

に認めた上で、沖縄が固有に抱えてきた（もっと正確にヤマトとの関係でいえば、常に従属と被支配の関係を強いられてきた）歴史と経験が沖縄の作家たち固有の問題意識や表現をもたらしてきたことを自覚したうえで、展覧会の構成を提示していることがわかる。この展覧会は、その趣旨からして、単なる狭い意味での美術や芸術の展覧会にとどまるのではなく、「9条と戦後美術」という枠組みのなかで、美術表現における平和や「戦争放棄」という主題へのアプローチを捉え返し、未来に繋げることを提起するものだと解釈できる。

このような展覧会の企画趣旨に照らしてみると、昭和天皇を素材に用いた大浦の『遠近を抱えて』が展示されないことで展覧会全体のコンセプトを保つことがはたしてできたのだろうかと問わざるを得ない。裕仁は、日本の戦争責任の中心人物でありながらその責任をとることなく戦後も天皇の地位にとどまった、戦後の象徴天皇制と憲法9条の平和主義にまとわりつく「ねじれた状況」を文字通り体現する存在として、今回の展覧会のテーマとして避けて通れない人物であることは間違いないからだ。

さらに、裕仁については、沖縄の運命を決定づける少なくとも二つの大きな出来事に関与していたことを忘れるわけにはいかない。ひとつは、沖縄戦の実行を積極的に押し進めたこと。裕仁は沖縄の人びとが巻き込まれることを承知のうえで、地上戦による徹底抗戦を妄想した。しかも、多くの証言で明らかになっているように、沖縄の人びとがもっとも恐れたのは、米軍ではなくむしろ「集団自決」を強要した天皇の軍隊、日本軍であった。もう一つの出来事は、敗戦後の日本の「独立」を維持する代償として、裕仁は沖縄を米軍に売り渡すことに積極的だったということだ。沖縄は、米軍統治下に置かれた結果、戦後憲法の制定過程にいっさい関わることができていない。憲法9条は、沖縄が米軍基地によって占領されたことと表裏の関係にあり、この構造の中心に敗戦直後の裕仁の判断が関わっていた。

門外漢の館長が判断

沖縄県美での検閲の経緯は複雑であり、その細部をここで論じる誌面的な余裕はない。むしろ、肝心な点は、この検閲が館長の判断によるトップダウンの指示に基づくもので、県美の学芸員など美術の専門家による慎重な検討は一切なされていないということである。牧野館長は、元沖縄県副知事であるが、美術の専門家ではない。門外漢の館長の判断が、企画担当のキュレータ、渡辺の意向を強引にねじ曲げた。

沖縄県美は年6回の企画展を行い、そのうち2回だけを県美が直接企画し、残る4回を指定管理者である「文化の杜」共同企業体が請け負う。今回の企画も「文化の杜」が請け負った企画である。キュレータの渡辺は、「文化の杜」との間で企画を詰めた後に、企画案を館長に示した。「文化の杜」から館長に企画書が提出された段階で、館長から大浦の作品の展示拒否の指示があった。館長は、大浦の作品を展示するなら企画そのものは通せない、企画をやりたいなら大浦の作品をはずすことが条件だ、という二者択一を迫った。これに対して渡辺は、「文化の杜」の担当者を通じて館長の意向を聞く。本来ならこの段階でキュレータは、館長と直談判するなどを行なうべきだったろうが、なぜか渡辺は館長の意向を館長に会うこともなく呑んでしまう。もちろん、同意したわけではなく、作品非展示を無理矢理呑まされたというのが渡辺の個人的な思いであることは間違いないが、しかし、その思いに対応するだけの館長への抗議や交渉を行なうことを彼は怠ってしまう。館長サイドからは、『遠近を抱えて』を展示しないかわりに大浦の別の作品（映画『日本心中1911～1945』）への差し替えなら構わないということから、渡辺は大浦に作品差し替えを打診してしまう。逆に大浦からは、作品を裏返して展示してほしい、作品の差し替えは断る、という返事があったが、作品裏返し展示は「文化の杜」（美術館）から拒否され、結局大浦はこの展覧会にいっさいの作品を出品しないことになった。右に述べたように、大浦の作品はこの展覧会で唯一天皇を扱った作品であって、9条と天皇制と沖縄の関わりを考えた場合、この作品の非展示を簡単に妥

協して呑んでしまうような対応をしたキュレータの責任は免れないだろう。もし、キュレータがあらかじめ牧野館長から展示拒否の理由をはっきりと聞き出していたなら、それでもかれは展示拒否を受け入れることができただろうか。

牧野館長は、今回の展示拒否（彼は展示の「謝絶」と表現している）について、展覧会が終了するまでは、「教育的配慮」「総合的判断」といった文言でごまかし続け、作者の大浦が直接館長に抗議を行なった会期終了直後の5月18日の会見でもほぼ同様の理由しか述べられなかった。

天皇への「敬愛」を押し付ける牧野館長

館長が、展示拒否の理由を具体的に述べ始めるのは、展覧会が終わってからのことである。大浦が館長に抗議した直後に開かれたマスコミとの懇談の席で館長は、「（天皇制への賛否がある中）バランスを欠いたものを公的機関が支援できない。外した作品には裸体や入れ墨もあり、県教育委員会の下にある公的機関としてふさわしくないと判断した」（『琉球新報』5月19日）と初めて拒否理由を具体的に語った。

その後館長は6月に入って、より詳細に自らの展示拒否の措置を正当化するための長文のエッセイを『沖縄タイムス』に3回にわたって連載する。この原稿は「教育的配慮と自由裁量」というタイトルで、第1回目では、展示拒否に至る経緯を説明して、企画担当者も合意の上でのことだという点を主張し、第2回目で展示しない決定を美術館の「自由裁量」の範囲内であるとし、第3回目では、『遠近を抱えて』の天皇表現に踏み込んで、教育基本法にある天皇への「敬愛の念を深める」という趣旨に合わない作品であるという持論を展開している。

牧野館長のこの原稿は、作品展示拒否の事実関係について、読者に大きな誤解をもたらす内容を含むが、なかでも、連載の第3回目に言及されている天皇にかかわる表現と公立の文化施設との関連については、大変大きな問題がはらまれている。牧野館長の天皇に関する言い分を以下、やや長くなるが引用した上で、その問題点を指摘したい。

「当該作品については専門学芸員とともに検討し、さらには教育長の指導を仰ぎ、当美術館における展示は『ふさわしくない』と判断された。その理由は、当美術館の設立根拠『沖縄県立博物館・美術館の設置及び管理に関する条例』によって、『教育的配慮』が要請されているからである。

同条例は、作品や資料などの収集、保管、展示など、いかなる事業の実施にあたっても、最も重要な視点は『教育的配慮の下に』なされなければならないと規定している。自由な活動が可能な民間の施設とは異なる、重要な運営指針である。（中略）

ところで、『教育的配慮』の基準は『教育基本法』および『学習指導要領』の趣旨である。教育基本法第2条は、今日重要と考えられる事柄として『豊かな情操と道徳心を培う』、『公共の精神』、『伝統と文化の尊重』、『我が国と郷土を愛する』などの教育目標を掲げている。

ちなみに、『天皇』に関する教育は『小学校学習指導要領』の『社会科』の部において、『日本国憲法に定める天皇の国事に関する行為など児童に理解しやすい具体的な事項を取り上げ、歴史に関する学習との関連も図りながら、天皇についての理解と敬愛の念を深める』よう指導するものとされている。『中学校学習指導要領』も、同様な趣旨を明記している。

もとより、天皇に対する受け止め方は各自の自由であり、多岐にわたるであろう。憲法26条は、『すべての国民は……その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負う』と定めており、その『義務教育』は、上記の小・中学校学習指導要領に即して行われることが求められるのである」。

この牧野の理屈のように、教育基本法や学習指導要領を持ち出し、「天皇への敬愛」を文化施設に押し付けることが正当化されてしまえば、公立図書館や公共の集会施設における言論表現の自由は確実に戦前化するだろう。大学の学問や教育の自由も同様に危ういことになる。図書館や大学にみとめられる自由を

展示を拒否された大浦信行版画連作『遠近を抱えて』の一部

美術館が持てないということはあってはならないことであるのは言をまたないであろう。言い換えれば、天皇の敬愛や学校教育を持ち出すことは、多様な価値観を前提とする社会の文化や知の有り様を真っ向から否定することにしかならないのだ。

平和資料館や写真展にも介入

問題はそれだけでないのだ。教育基本法や学習指導要領を援用して、天皇への「理解と敬愛」を理由に作品の展示を拒否する牧野館長のこの言い分は、実はこれが初めてではない。1999年、稲嶺恵一県政時代に起きた新平和資料館における検閲事件でもほぼ同じ理屈が使われていたのだ。この平和資料館検閲問題に当時副知事だった牧野が検閲の当事者として深く関与していたことは、沖縄ではよく知られている。新平和資料館は、太田昌秀県政時代に基本計画と設計、契約が終わり、展示作業を残すのみになっていたが、稲嶺県政下での実際の展示作業で多くの展示改ざんが行われた。沖縄戦で、負傷兵たちに自決を強要する衛生兵が削除されたり、住民を威嚇する日本兵の銃が撤去され、「集団自決」の写真の差し替えなど日本の加害に関する多くの展示が削除、修正された。こうした検閲に、当時の牧野副知事は中心的に関与した者の一人であった。

牧野副知事は当初の展示案について、「国家に対する認識など基本的認識が全く異なる。資料館は永久に残る。展示作業そのものをストップしたらどうか。私は展示の概念が契約より優先だと思う」と述べ、資料館それ自体の設立の中止を示唆する発言すら行なっている。そしてこの資料館の展示内容の検閲については、「文部省検定の教科書記述などを基本に、展示を行う」（事務局資料）というものであり、当時すでに今回の沖縄県美の検閲と非常に類似した理由が検閲の正当化の論理として利用されていたのである。

牧野は県立博物館・美術館の館長として、アトミックサンシャイン展の企画内容をチェックする上で、判断基準に平和資料館の展示に関する基準を念頭に置いたのではないか。

しかも、牧野館長による検閲は、これにとどまらない。アトミックサンシャイン展に先立って今年2月に開催された「石川文洋写真展　戦争と人間」においても、牧野館長は一部の写真の展示を拒否した。『沖縄タイムス』はこの問題について次のように報じている。

「同写真展は報道カメラマンの石川文洋さんが、ベトナム戦争を撮影した50枚を展示。そのうち、米兵がバラバラの遺体を手にしてたたずむ作品『飛び散った体』が展示されなかった。本来同作品が展示されるはずだったスペースに『館長の判断により非展示』とする内容の張り紙が貼られている。

石川さんが非展示を知ったのは写真展初日。

学芸員から『館長の意向で同作品は倫理上の観点から展示しないことになった』と電話連絡を受けたという。

石川さんは、『公開した50枚は戦争の残酷さを表現している。戦争は人間の尊厳が破壊される行為であり、非展示になった作品もその一つ』と疑問視する。県には非展示の理由を文書にしてほしいと申し入れた。現在までに返答はない。

非展示となった作品を含む同写真展は、過去にも沖縄市役所ロビーや読谷村立の文化ホールなどで開催されたが、問題はなかった」

沖縄に対する「文化戦争」

新沖縄平和資料館の検閲から一貫して起きていることは、沖縄の人びとの戦争体験とその継承を通じて形成されてきた戦争の加害と被害の真実、戦争の悲惨さ、そして戦争責任と国家のあり方が、まさに日本の国家が「国民」に対して押し付けようとしているナショナリズムのイデオロギーと大きく乖離し、摩擦を起こし続けているということだ。中央政府は、右派に政権を握られた地方自治体を通じて、中央の価値観や文化を押し付ける。この押しつけに、中央の文化資本が一役買う。保守化した地方自治体の文化施設はこの意味で、中央政府のイデオロギー装置になりかねず、地域の自立的な価値観を払拭して中央に統合するための橋頭堡としての役割を担わされる危険性をもっている。とりわけ沖縄のように中央政府やヤマトとは異なる歴史的な経験をもつ地域を中央に統合するための重要な役割を教育や文化施設が担わされるという問題は、植民地主義による文化支配の重大問題である。この意味で、現在の沖縄をめぐる文化状況は「文化戦争」であるという指摘が沖縄で聞かれるのもうなずけるのである。

今回の沖縄県美の問題は、『遠近を抱えて』の非展示問題に限定されない大きな構造的な問題をはらんでいる。文化支配と歴史の記憶や経験の改ざんを伴う沖縄をめぐるヤマトによる支配の問題と密接不可分なのである。今現在の沖縄は、米軍基地とともに自衛隊も「進駐」し、軍隊の次に本土資本が、そしてさらに本土の文化が沖縄を蹂躙する事態になっている。まさに、植民地の様相は、深まるばかりだ。このことの端的な現われが今回の沖縄県美の検閲であったのだ。

（おぐら・としまる、富山大学教員）

■参考資料　本文で指示したもの以外に下記を参照しました。
『けーし風』25号　特集「検証・平和資料館問題」1999年
石原昌家、大城将保、保坂廣志、松永勝利『争点・沖縄戦の記憶』社会評論社、2002年。

■付記　沖縄県美の検閲問題へのさまざまな抗議行動が取り組まれている。複数の抗議声明や署名運動の他、7月の沖縄県議会には、検閲を批判し牧野館長の更迭を求めるなどの陳情が出されている。また、7月18日には東京でシンポジウムが開催され、その後20日から約2週間、東京・茅場町のギャラリーマキで抗議の展覧会とギャラリートークが開催され、『遠近を抱えて』も展示予定である。これらの運動についての詳細は、下記のサイトをご参照ください。

Art Action 2009
http://sites.google.com/site/artaction2009/
大浦作品を鑑賞する市民の会
http://www.alt-movements.org/art_censorship/oura/atomicsunshine_censorship/Welcome.html

国家のウソを見抜く目を！

――6月25日読者懇談会から――

今回の読者懇談会には、二人のゲストに来ていただきました。「沖縄密約情報公開訴訟」弁護団事務局長の飯田正剛さんと、横浜事件第三次再審請求人の木村まきさんです。

国家の犯罪を裁けるかどうか

第一部は飯田さんが、レジュメをもとに「沖縄密約」裁判の現況を報告。この裁判の争点は、72年沖縄返還の際の日米間密約について30年以上国民をだまし続け、またその密約を暴いた市民に対して苦痛を与え続けてきた日本政府の「国家の犯罪」を裁判所が「裁くかどうか」だということ。そして飯田さんは、澤地久枝さんの『密約』（岩波現代文庫）は、大学時代に読んで感銘を受けた本、自分が弁護士になるきっかけの一つともなった本の著者と今一緒に法廷に立つことには感慨がありますと話されました。（注1）

第二部は木村まきさんのお話。話に先立ち、横浜事件の元被告で夫の故・木村亨さんの活動を紹介したビデオ『人権ひとすじ木村亨さんを偲ぶ』が上映され、亨さんの、「自分の人権に目覚め、自分のものとして闘いとろう」という張りのある肉声が会場に流れました。この木村さんの全身全霊を傾けた「人権」演説を初めて聴いた時、まきさんは衝撃をうけたそうです。知人の望年会の会場で出会い、惹かれ、自然に二人三脚の冤罪との戦いが始まったと伺いました。

市民の力で後押しを！

以下、お二人の話から・・・

飯田さん　本件の6月16日の第一回口頭弁論で、裁判長が、米側に密約文書があるのだから日本側にもあるはずとする原告側の主張は「理解できる」とし、吉野文六・元外務省アメリカ局長を証人に招くよう原告側に促しました。

異例ともいえる、希望の持てる訴訟指揮なので、今こそ市民の力、声で後押しをお願いしたいのです。傍聴席が一杯だと裁判官の心証も違います。8月25日にはぜひ東京地裁に傍聴にきてください。（注2）

またこの件を、朝日、毎日、東京新聞は報じましたが、日経、産経、読売は無視でした。ジャーナリズムのあり方も問わなければと思います。

犯人は国家、免訴では許されない

木村さん　5月29日に、刑事補償請求書を横浜地裁に提出しました。4人の遺族に対し、それぞれ拘留1日あたりの上限金額12、500円を日数分支払えという内容です。記者会見で、ある新聞記者から何に使うのかと訊かれて、弁護士費用にと答えました。もちろんお金を目的に裁判を提訴したわけではありません。

横浜事件は、戦争に反対する気持を持っている者を逮捕し拷問した事件です。キーワードは戦争。二度と戦争をしない国にするために長い裁判を続けてきました。

被告たちはもともと無罪で、国家が「犯人」。免訴判決はまちがっています。国家による謝罪を引き出すために、生きている限り、自分としてやるだけのことはやろうと思っています。　裁判を徒労かもしれないと感じたこともありますが、冤罪をこれ以上増やさないためにも、一人ひとりがあきらめないで声を出し続けることが大切と思います。

飯田さん　僕が弁護士の先輩に言われたのは、まず仲間を3人作れ、ということです。いくつかの裁判も、最初は「3人の仲間」から始まっています

（文責・阿部めぐみ、本誌編集委員）

注1・澤地久枝さんは本件の25名の原告団のお一人

注2・沖縄密約情報公開訴訟第二回公判は8月25日16時より、東京地裁第705号法廷にて行われます。

〈原爆〉を伝えることの難しさ

俳優　林　次樹さんにきく

広島、長崎の悲劇から64年目の夏。オバマ米大統領は初めて核廃絶を語ったが、世界の現実はほど遠い。あの悲惨な体験を私たちはどうすれば世界に、あるいは後世に伝えることができるのか。1996年以来、国内・国外で400回以上の公演を重ね大きな反響を呼んだミュージカル『はだしのゲン』の出演者、林次樹さんにきいた。（聞き手・本野義雄　本誌編集委員）

――『はだしのゲン』は、どこでも大好評だそうですね。

『はだしのゲン』のようなお芝居は、日本全国にある何々演劇鑑賞会といった会員制の団体が買ってくださって巡演します。この作品は本当に評判が良くて、ほとんどの演劇鑑賞会で90％を越える支持率がありました。逆に少し気持ち悪いなと。演劇というのはもう少し反応がばらついて、面白い人もいればつまらない人もいるという方が健全だと思っているのですが――でも、多くの人たちから、その内容、メッセージの問題だけでなく、「演劇として面白かった」「クオリティの高いものを見せてもらった」という評価を頂くので、そこは嬉しく素直に受け止めています。

――99年に、原爆を投下した当事国アメリカのニューヨーク公演を挙行したわけですが、その直前にスミソニアン博物館で予定されていた原爆展が、退役軍人らの反対によって中止される事件があったそうですね。

その時も、今も、アメリカは、原爆投下は正当であったという立場は変えていません。そのアメリカ人を前に、いかに原爆投下が愚かな行為であり、どんな理由や大義を振りかざしても、断じて投下するべきではなかったという思いを込めた演劇を上演することは、それなりに勇気のいることでした。

たった5回の公演でしたが、日本の無名なカンパニーの公演としては、精一杯でした。ところが、辛口で有名だという、ニューヨークタイムズ紙の劇評に『原爆の町で希望を胸に生きる』と題してローレンス・ヴァン・ゲルダーという評論家が記事を書いてくれました。「ミュージカル『GEN』は心奪われる、感動的かつ悲痛な、平和への叫びである」「この劇は、原爆投下以前に、敗戦が極めて明らかだったにもかかわらず、戦争を続行した日本政府に対する痛切な批判とともに、原爆がもたらした広島の人びとの死と苦しみに対する痛恨の思いを訴えている」「半世紀以上の時を経て太平洋戦争の終結を見つめたこの作品は、しかし希望に満ちている。」と、ほぼ絶賛に近い内容で、当時TBS『NEWS23』で取り上げられ、筑紫哲也氏が「ニューヨークタイムズがこんなに褒めるのは異例」とコメントしたことを覚えています。些か手前みそながら、苦労して創り上げた舞台が国外でも評価されたことは素直に嬉しいことでした。

しかし、この劇評にもアメリカの加害国としての反省は、かけらもなかったことも事実です。日本があの戦争で犯した、様ざまな加害行為の責任と反省を我われがいつまでも忘れることなく継続していかなければならないように、現在のアメリカにも正義の戦争はありえないこと、加害国の認識を持つべきことを訴え続けるべきでしょう。

――メッセージは、半分しか伝わらなかった？

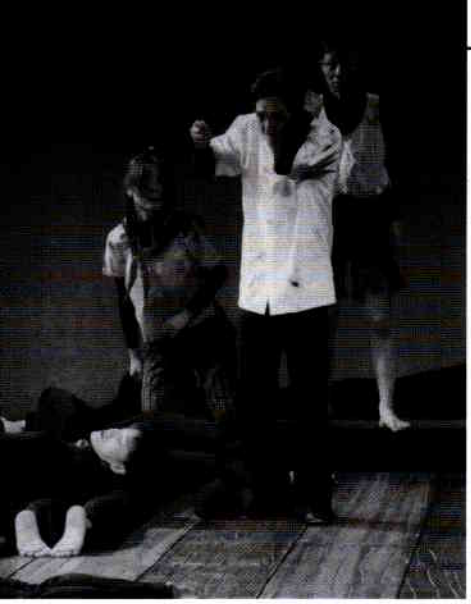
観客の中には、「原爆を落とされた側の人たちはそんなに苦しかったのか」「その後もひどい火傷や後遺症に苦しんだのか」――そういったことを初めて知ったという人もいました。そこまでは理解するけれども、では原爆投下が正しかったのかと言われれば、彼らの大部分は「正しかった」と言い続けるだろうと思います。

――その次の海外公演は韓国のソウルでし

たね？

『GEN』の中にも「朴さん」という登場人物を通して、日本の朝鮮に対する加害のことを描いたシーンがあります。演劇としての評価はやはり高いものをいただきましたが、終演後、ある年老いた観客が話してくれた言葉が、今も心に沈んでいます。「我われの苦しみはこれ以上だった。なぜ、私たちがみな日本語を話せるのか、あなたたちは考えたことがありますか。私たちは、日本に原爆が落とされたことを聞いて万歳を叫びました。ざまあみろと思いました。そういう歴史を忘れないでほしい」。老人は、絞り出すようにしゃべってくれました。帰国する前日、みんなで、板門店のツアーに参加しました。板門店には、些かわざとらしいような緊迫感を作るための演出も感じましたが、同じ国の人々がある歴史によって引き裂かれ続けている現実は、そのわざとらしさ故に、一層重いものを突き付けられたように思います。

『はだしのゲン』
中沢啓治原作の長編マンガによるミュージカル（木山潔製作、木島恭脚本・演出）。原爆で家族を失い、自らも被爆した少年が逞しく生きてゆく物語。



ミュージカル『はだしのゲン』　舞台中央が筆者
（提供・木山事務所）

――ほかの国々ではいかがでしたか？

その次はポーランドの三都市（クラコフ、ワルシャワ、ヴラツロワ）での上演でした。ポーランドは前衛的芸術活動が盛んな国ですから、観客の目も厳しい。もちろん公演がうまくいった時はスタンディング・オベーションですが、演劇は生もので、ちょっとしたことで出来が悪いと、ほんとにおざなりの拍手しかもらえません。いい経験をしました。

公演の休みの日、今度はアウシュビッツ強制収容所跡を訪ねました。収容所の部屋にある、殺されたユダヤ人から奪った夥しい数の頭髪・鞄・眼鏡などの一見無造作な展示が、圧倒的な存在感を持って見る者に語りかけてきます。同じ敗戦国である日本とドイツは、戦後補償問題など、よく比較されますが、歴史をどう残し、どう伝えるかといったことでも、日本は違う方向に向かっている気がしてなりません。

そして、一昨年、ロシアのモスクワとヤロスラーブリでの公演を行いました。私の個人的な印象ですが、ロシアでは原爆投下についての認識が薄いというか、遠い国の昔の出来事といった捉え方を感じました。しかし、どの国のどの公演でも同じですが、『GEN』が舞台芸術として高く評価されたことと、あの原爆のきのこ雲の下に、命を、夢を、愛する人を失った、多くの市井の人びとがいたこと、そして生き残った人びとの悲しみや怒りは今も、これからも消えることはないことを、小さな演劇公演を通して少しでも理解してもらえたことは、決して無駄ではなかったと考えます。

――これまでの公演で、もっとも印象に残ったことは？

『はだしのゲン』は日本でも、全国各地で上演してきました。広島での公演の後、ある被爆女性が私たちに語ってくれたことがあります。「私は、あの日のこと、あの時のことに、なるべく触れないよう、避けるように生きてきました。でも今日、戦争体験もない、私から見れば若い俳優さんたちが、全身全霊を込めて演じて下さる姿を観て、私も勇気をもらいました。元気をもらいました。これからは少しずつ、私の体験を若い人たちに語っていこうと思います。素晴らしい演劇をありがとうございました」とね。演劇にはそんな力が確かにあると、私は信じています。

（はやし・つぐき、俳優、Pカンパニー所属）

運動の現場から

上関原発建設計画を阻止するために

山戸 貞夫

田ノ浦海岸に座り込む住民

山口県の南東に位置し、室津半島と、長島、祝島、八島から成る上関町は、その名の通り古来より瀬戸内の西の「関」として旅人はこの地に憩い、荷揚げで港を賑わせた、由緒ある歴史の地です。

特に田ノ浦は、温暖な気候と黒潮の流入、そしてずば抜けて豊富な湾内の湧き水。このコントラストが、他にはない独特の生態系を築き上げ、数々の希少生物と豊かな漁場を育んできました。人もまた、その恩恵に集い、田ノ浦の縄文遺跡は自然と人との共生の証といえます。

もはや自然海岸が2割しか残っていない瀬戸内海にあって、上関町は、いまだ7割もの手つかずの海岸を残しています。自然とともに自立して生きる営み、それを守ってきたのが、約3500人の暮らす上関町です。

原発立地で引き裂かれた地元

1982年、中国電力による137・3万キロワット・2基の原子力発電所建設計画が浮上しました。以来、30年近くにわたり、町民は推進派、反対派に二分され、対立が続いてきました。

推進の立場をとる町当局は、原発関連の財源に依存せざるを得ないという立場を取っていますが、地域有力者及び中国電力の強い介入にもかかわらず、町長選や町議選では、今なお3～4割の町民が、反対候補に票を投じ続けています。中でも、計画地の対岸わずか4㎞にある離島・祝島では、今なお島民の約9割が、計画に強く反対し続けています。そのため1号機着工予定は、当初の2002（平成14）年から何度も延期を続けてきました。

失われる多様な希少生物

外洋と内海の出会う上関町の希少な自然環境は、独自の生態系を育んでいます。たとえば、田ノ浦の海域には、保護動物に指定されたスナメリ（体長2メートルの小型クジラ）、絶滅危惧Ⅱ類のカンムリウミスズメやハヤブサ、同じく絶滅が危惧されるナメクジウオの繁殖地があります。このほか、新種の巻貝ヤシマイシン、希少種の海草スギモクの生息地であることも確認され、多くの研究者や学会が、埋め立てを中止し、より詳しい生態調査を実施すべきだと指摘しています。

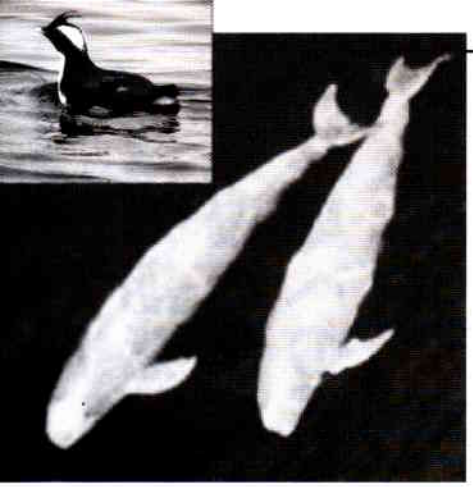
さらに、埋め立て予定地には「縄文時代の遺跡としては質・量とも西日本トップクラス」と評価されている「田ノ浦遺跡」も含まれています。

土地買収も未完了なのに計画進行

中国電力の所有する原発用地内には、反対地主の土地（未買収地）があり、原発敷地を取り巻く形で点在（最短距離では炉心予定地から250m）しています。私有地がこんなに残っている事実が、地元の合意を得られていないことを表わしています。

今ならまだ間に合う

日本で最後の新規立地といわれる上関原発。今春、中国電力は態度を急変させ、敷地の造成に着手しはじめました。まだ合意が得られたとはとても言えない状況での強行は、住民の対立をさらに深めています。一方で、上関原発計画に反対する声は、全国的に大きく広がってきているのも事実です。まだ議論は尽くされていません。今なら、まだ間に合うのです。



小型のクジラ・スナメリ（下）　この周辺の海域で出産・子育てをしているといわれる。カンムリウミスズメ（上）　絶滅が危惧される、国の天然記念物。写真提供・長島の自然を守る会

考えてほしい、この原発は必要か

中国地方の電力は、不足していません。数万年もの管理が必要な放射性廃棄物の最終処分地は未だ決まっておらず、ウラン埋蔵量の寿命も約80年と言われています。

世界の潮流は再生可能な自然エネルギーへと、シフトしつつあります。瀬戸内に最後に残された上関の自然をつぶし、地元に深い対立を残すこの事業は、本当に今、必要なのでしょうか。

私たちは、全国各地の住民の皆様に上関原発計画が抱える問題を理解して頂くために、計画中止を求める全国署名運動を始めました。なにとぞ、ご理解とご協力をお願い致します。

（やまと・さだお、上関原発を建てさせない祝島島民の会代表）

署名の集約先：原水爆禁止山口県民会議
〒753-0078 山口県山口市緑町3—29
労福協会館2F
☎083-922-1841
fax083-924-8145

■webによる署名用紙のダウンロード先：
http://blog.shimabito.net/

上関は地震の多発地帯

上関原発予定地は、「伊予灘および日向灘周辺地震特定観測地域」に入ります。30キロ南に中央構造線の走るこの地域では、普段から地震が多発しています。文科省は海底活断層の最初の調査地として、予定地のすぐ西を走る岩国活断層を指定、警戒しています。

第8期意見広告運動の反省と第9期への展望

佐藤光子

去る5月3日、「戦争をとめよう！　人間らしく生きたい」と訴えた爽やかな新緑のイメージの意見広告が掲載出来ました。

私たち事務局では、この第8期の1年を振り返って、具体的に改善すべき点、来期への課題などを考えてみました。

第8期では、前号でもご紹介したように、賛同者を増やすために、また若い方々を巻き込むために、幾つかの新しい試みをしました。そのそれぞれについて、また従来のルーティンワークについて、第9期のために細かく検証してみたいと思います。

●2種類チラシの反省点

①賛同チラシをフルカラーでA3とA4（配布用）の二種類にしたこと。

【表紙のカラフルな9のロゴと、犬塚昭夫さんの反戦詩、社会保障費と比較した米軍再編に使われる税金の額のコラムなどはわかりやすく親しみやすいイメージとして好評でした。配布用A4チラシについては、スペースが狭いことで、「反戦歌の募集」「賛同金の締め切り期日」が掲載されなかった事が失敗でした。A3チラシについても、「賛同金の締め切り期日」は、「12日必着」のように厳密にしたほうが、締め切り直前のトラブルを避けられたと思います。読み応えのあるA3チラシの方が人気がありましたので、来期も配布用を作成する必要があるかどうかは、検討した方がいいでしょう。】

●ホームページも充実、しかし――

②ネット時代に合わせて、ホームページをカラフルな壁紙と斬新な構成に一新し、「事務局風景」に、ボランティアの日常活動の状況や意見広告関係グッズの紹介、新しい情報などを掲載し、日々更新しました。また、「イベント情報」には、平和団体の集会・講演会の情報を掲載し、講演会などに出席したい方へのご案内としました。「行ってきました」のブログには、事務局スタッフが参加して賛同チラシを撒き、講演を聞いてきた様々な集会のレポートを写真とともに掲載しました。

【担当者が、日々更新し、テンプレートなども親しみやすいものに工夫した割には、訪れる人（ホームページを見る人）が、それほど増えませんでした。集会案内についても首都圏に限られているので全国の方々には無縁だったことがあるかもしれません。もう一工夫が必要です。】

③前述したように、今期は事務局スタッフが手分けをして、学習と宣伝、賛同チラシを撒くためにたくさんの集会・講演会に参加しました。ブログに掲載分32回です。

【集会や講演会で学習したことによって、情勢の把握ができたため、賛同チラシや意見広告の文章を作成する上ではプラスになりましたが、やはり首都圏に限った集会で、どの集会も同じような方が参加されるので、賛同者をたくさん増やすということにはあまりつながらなかったと考えられます。ただ、こうした取り組みは、あきらめないで続けた方が良いと思います。】

●Tシャツは好評、広告も拡大

④若い方に関心を持っていただくためということもあって、新たに「意見広告」Tシャツを作成、9条シールもデザインを変え、カラフルなものにしました。

【Tシャツは好評を博し、冬場でも良く売れました。シールも出足がよく、再注文も増えました。ただ、シールは原価を安くおさえるために撥水コーティングができなかったので、車の窓などに貼られた方からは、色が流れてしまうとの苦情をいただきました。また、事務局では、デザイン作成段階、業者との交渉段階、出来上がってからの発送作業など仕事量が増えてかなり大変でした。発送作業の改善を考えたいと思います。】

⑤意見広告募集のための広告を開拓し、仏教関係などに広げました。

【広告の効果とコストという点では、昨年に引き続いて掲載した『日刊ゲンダイ』については、高額な割には、効果が薄いということが言えると思います。『週刊金曜日』の裏表紙のカラー広告はかなりの反響がありました。こうしてみると、少し出費しても、広告媒体によっては、ある程度の大きさでカラー広告を掲載する方が効果が期待できるかもしれません。新たな新聞、雑誌を開拓する必要性も感じました。】

⑥賛同金のPC入力、照合、修正、再照合、再修正、入稿について。

【今年はノートパソコンも増やし、ボランティアスタッフも増えて、入力については比較的スムーズに進みました。ただ、終盤になると照合、修正に追われ始めて、お互いにミスもあり、それをカバーする時間的な余裕がなくなりました。掲載氏名の間違いを少しでもなくすためには、もっと早めに再照合、再修正を完了できると良いと思います。特に最後の入稿時はまったくぎりぎりで、デザイン事務所にご迷惑をおかけしました。大事な反省点です。】

●集会参加者をふやすには?

⑦映画とトーク、写真展の開催

【例年2回行われている意見広告宣伝のためのイベントを今回は1回にし、上映会、トーク、写真展と盛りだくさんな企画をしたわけですが、幾つか反省点はありました。

（1）もっと参加者を増やすにはどうしたらいいのか。事前に「30の会」からのハガキ、「意見広告」事務局からも、大量発送の時に首都圏の賛同者に映画のチラシを封入、他の団体の講演会でも映画チラシを配布しましたが、170名を超えることはできませんでした。交通至便のよい会場だったのですが、ほかの団体のイベントと重なって集客が難しかったです。

（2）来場された方々からは、好評でしたが、「アメリカばんざい」という映画の宣伝が事前にもう少し必要だったようです。

（3）写真展は概ね好評でしたが、鑑賞の時間が少し短くてもったいないところがありました。

（4）物品販売は、途中でTシャツについて、会場からストップがかかりました。そうでなくても、短い休み時間に色々な物品を販売するのは無理があるようです。　担当者からは関連書籍だけで精一杯と聞きました。】

⑧最初の賛同チラシ発送、2月の大量発送、報告書発送、5月3日の電話対応、日々の電話対応、チラシやグッズの発送、お礼状などの郵送、印刷業者との交渉、鈴木デザイン事務所へのお願い、会計処理など。

【今年は、事務局スタッフが事務所に出る日を毎週、表の形で明らかにし、メーリングリストで流しました。いつ誰が対応しているか明確で良かったと思います。会議の記録も議事録をまとめて、常にメーリングリストで流しました。お礼状はこまめに出したことによって全国の賛同者とつながりました。会計も日々の管理者がすぐに精算したことでやりやすくなりました。スタッフの連携については改善すべき所がありました。】

第9期の課題は、全国に、特に地方の皆さんの間に、もっともっと賛同者を増やすように取り組むことだと思います。

具体的には、全国の9条の会など、平和団体に直接接触して、賛同チラシを撒いていただくようにお願いできればと考えています。

読者の皆様も、ご提案、ご意見をお寄せ下さい。

（さとう・みつこ、市民意見広告運動事務局）

連載エッセイ・第12回

自由の行方

鈴木一誌

書物には、どうしても地図が必要な種類の本がある。かつては、地図製作にかかる費用はかなりのものだった。もちろん地図づくりの専門家に頼むのだが、現状をふまえながら精密な地図をつくるには、手間がかかった。その地図製作が、ちかごろ劇的に安くなった。理由は、カーナビの普及である。

全国で使用可能なカーナビを発売するためには、津々浦々の地図情報が必須となる。カーナビの開発が、日本全国をデジタルな地図情報で覆ってしまった。この情報が、地図製作の現場に環流しているというわけだ。もはや最初から道路の線を引く必要はない。地図製作に参入するハードルも低くなった。こうして、地図製作がコストダウンされたのだが、いっぽうでは、日本にはもはや未知の道などないのか、との寂しさもぬぐえない。

気がつくと、アマゾンをはじめとするネット書店で本をかなり買うようになっている。理由はさまざまあるが、それはともかく、書店まで足を運び、ページの手触りを確かめずに買うには、やはり後ろめたさが付きまとう。ネット書店に不気味さを感じもする。「この商品を買った人はこんな本も買ってます」というオススメのなかに、買おうと思っている本が入っていたりするからだ。わたし自身が装釘した書物をすすめられたりして、苦笑することもある。

各種のカード類も、〈わたし〉という人物像を描きだしている。クレジットカードの履歴によって、どの店でなにを買い、イタリアンなのか中華なのか、食べ物の嗜好まで捕捉されているのだし、宿泊予約情報からは夜の行動までが露わにされている。レンタルビデオの情報は、アダルトビデオのファンなのか、ヤクザ映画のマニアなのかを明け透けにする。「スイカ」「イコカ」「パスモ」などの交通機関のカードも、個人の行動パターンを輪郭づける。

ネット上の検索も、無料でありがたいのだが、だれがどんな項目を検索したかは、個人情報として完全に守秘されているのか。いかなる項目にアクセスしたかがわかれば、個人像が浮かんでくる。サービスする側からすると、ユーザーの志向がわかれば、検索の支援ができることになる。予約や検索、レンタルやカード決済などの、ひとつずつは些細なデータを撚り合わせるシステムによって監視されたら、と想像すると怖い。

クルマでの走行データを、インターネットで情報センターにフィードバックするシステムがはじまっていると聞く。たとえば、どこで急ブレーキをかけたかのデータを重ね合わせると、どの道路の危険度が高いかがわかる。道路形状の改良や交通標識の改善に役立つらしいが、いっぽうでは、自由に道を走れなくなるのか、とも思う。道を走るのではなく、情報の上を走ることになる。

どの本を買うのかは、たしかに個人の自由なのだが、平らな野原をどう歩いてもよい自由とはちがう。「この商品を買った人はこんな本も買ってます」というほど一本道ではないにしても、選べる道は限られる。まず、これまでに接してきた本がわたしのなかに蓄積され、その蓄積がつぎに読む本を選ぶベクトルとなっていく。個的に蓄えられたデータを外部化したのがネット書店の顧客データだとするならば、買い物点数の増加と統計テクニックの更新によって、顧客像の形成はどんどん精緻になっていくだろう。

つぎにどんな本を買うか、あるていど予測されるようになるのかもしれない。そのデータにもとづいて出版される時代になったら、なんとつまらない世の中だろう。

（すずき・ひとし、グラフィック・デザイナー、題字デザインも筆者）

慎ましやかな生の讃歌
「妻の貌」

監督・撮影・編集／川本昭人　ナレーター／岩崎　徹、谷信子、川本昭人　配給／「妻の貌」上映委員会　2008年ドキュメンタリー　114分　■7月下旬より東京・渋谷ユーロスペース、川崎市アートセンター、8月1日より横浜市ジャック&ベティほか全国で順次公開

●家庭用DVDが普及した今日では、家族の日々の姿を記録したヴィデオ映像を溜めこんでいる家も稀ではない。知人の結婚式などで、新郎新婦の幼時、小学校入学時や運動会などの編集された映像を見せられるのは、やや退屈とはいえ楽しくないこともない経験だ。時の流れ、人間の成長を感じさせる記録には、どんなに平凡であっても何かしら感動的な要素が含まれているからかも知れない。

●「妻の貌」の非凡さは、そうした家庭内の記録映像だけを素材にして、すべてを表現しようとした点にある。ほとんど独力でこれを作った川本昭人さんは、酒造会社の経営者として働くかたわら、長男の誕生を機に始めた8ミリカメラからスタートして、半世紀にわたり家族の姿を撮り続けてきた。その中心にいるのは、自らも原爆症（甲状腺がん）を抱えながら、寝たきりの姑を介護し二人の息子を育て上げた妻のキヨ子さん。彼女はまた、実の弟をも原爆で失っている。

●映画は、あくまで日常生活のリズムで淡々と進行し、とりたてて原爆の被害が詳しく語られるわけではない。にも拘らず、キヨ子さんが入院した時同室になった同じ原爆症患者の女性が、衣服を脱いで肌に刻まれた傷を示す場面や、テレビで大平数子さんの詩「慟哭」が朗読されるのを、アイロン掛けをしながらキヨ子さんが聴く場面などは、私たちを粛然とさせる力がある。

●これは、高齢者介護を描いた作品でもある。キヨ子さんの姑（川本さんの実母）のワカノさんとキヨ子さんの間には、昔はいろいろ確執もあったらしいが、寝たきりになってからは、ワカノさんはすっかりキヨ子さんに頼り切るようになった。幼い曾孫たちも毎日のように枕元を訪れ、声をかけ、時には身体を洗うのを手伝ったりもする。被爆による脱力感に悩まされるキヨ子さんにとって、10年以上に及ぶワカノさんの介護は大きな負担であると同時に、生き甲斐でもあった。ワカノさんの死によって、彼女は心の支えを失ったと、夫に訴える。

●二人の息子の結婚、孫たちの誕生、成長、入学、成人と、他のどの家にもあるような人生の節目が川本家にも次々に訪れる。平々凡々な風景ともいえる。昔、「生きていてよかった」という被爆者の姿を描いたドキュメンタリー映画があったが、この慎ましやかな生の賛歌こそ、作者が表現したかったところかも知れない。生き抜くこと自体がたたかいだ、と実感している人びとは地上に無数に存在するだろうが、こうしてキヨ子さんのような無名の人びとの人生をつぶさに見る時、私たちが想起するのは、使い古された表現だが、人間の尊厳という言葉である。

●海の彼方では、バラク・オバマ氏が米国大統領としては初めて「核兵器を使用した者の責任」について言及した。政治の次元でこの言葉がどのような有効性を及ぼしうるかはまだ不明だが、より重要なことは、まず倫理の次元で彼の言葉の意味を深化させ、普及させることではないかとと感じた。

本野義雄（もとの・よしお、本誌編集委員）

表紙絵作者のご遺族に出会えた！

無言館ツアーの小さな奇跡

阿部めぐみ

6月6日13時30分、上田駅に参加者が集合し、「市民の意見・無言館見学プラス懇親会ツアー」はスタートしました。総勢33名。2台のマイクロバスと車に分乗して、一路無言館へ。心配された雨も降らず、無言館のある別所温泉へ向かう道中はのどかな田園風景が広がって、新緑が美しく輝いていました。

木もれ陽の中、全員で記念撮影

●私語はほとんど聞かれず

30分ほどで無言館に到着。記念撮影の後、1時間半後の集合まで、各自自由に見学ということになりました。初対面の緊張がほぐれてにぎやかになってきた面々に、入口で「静かに見てください」と早速注意がありましたが、それは杞憂だったようです。入口を入ってすぐのところに、かなり傷みの激しい、軍服姿の自画像があり、入館者がそれを目にして解説を読み始めた頃からは、ほの暗い展示場に私語はほとんど聞かれなかったような気がします。

第一展示館から一旦明るい戸外へ出て、第二展示館「傷ついた画布のドーム」へ。時間がおしてきて駆け足で見学。促されてふと上を見上げるとドームの天井全面にも、画学生達の作品が張られていました。描きたい、生きたいと思いつつ逝った若者たちの思いと、少しでもそれを表に出してやろうという無言館の方々の思いが共に感じられて胸をつかれました。

もう少し見ていたかったな、と思いつつ、大急ぎで集合場所へ。ところが皆さん同じ思いらしく、なかなか戻ってきません。旅館のバスの予定があるので、1台を残し、1台が先に旅館に行くことになりました。

上田からまず無言館へ、なごやかな車中

●偶然の重なりが奇跡を？

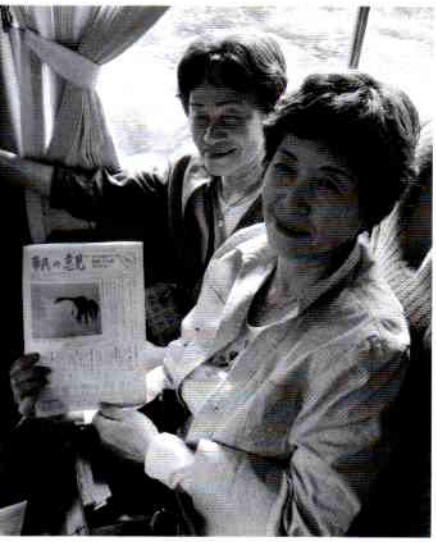
この時一番最後になってしまったYさんは後で皆に謝りながら、ほかを色々回って遅くなったのではなく、ずっと第一展示館の中にいたのだと言われました。ある絵を見て、戦争で死んだ友人と対話しているような気がしてそこにずっと立っていた、申し訳ありません、と。それをあまり責め

京都のAさんが持参したプラカード「九条実現」を皆で拝見

る気にならなかったのはいうまでもありません。ところが人間万事塞翁が馬（ちょっと違うか？）このことでYさんは、幸運の女神ならぬ奇跡の導き手に……

駐車場に停っている「上松屋旅館」のバスを見て、「今夜、同じ宿に泊まるのですが……」と声をかけた方がいました。女性のお二人連れだったので、どうぞご一緒にということになりました。バスが走り出した時、年配の方が、「亡くなった主人の絵がここにあるのです。」といわれたのです。

「どんな絵ですか」「白い馬が……」「えっ！もしかしてこの絵ですか？」『市民の意見』114号をお見せすると、お二人はびっくり。6月の第2日曜日に毎年行われる無言忌に参加するためにこられた、114号の表紙絵の作者、川崎雅さんのお連れ合いと、忘れ形見の娘さんだったのです。「これも父の引き合わせとしか思えません」と、娘さんは涙ぐんでおっしゃいました。お二人は上松屋を定宿にされている



114号を手にする川崎さんご遺族

そうで、翌朝の朝食時には大広間で、川崎雅さんの思い出のお話を伺いました。

●多くの人たちに思いを馳せて

18時からの懇親会は、車座に座って夕食をいただいた後のなごやかな雰囲気の中、自己紹介から始まりました。「無言館には行きたいけれど、団体行動や知らない人との宿泊、懇親会が心配でちょっとためらいました」という率直な意見や、無言館を訪れた感想、家族やご本人の戦争の記憶などが思い思いに語られていきます。手作りの機関紙を配られた人も。マイクが一巡してからは、話したい人が手を上げるという方式にしましたが、マイクはおおむね順番に手渡されて、3時間で5巡ぐらいしたでしょうか。その間、30名もの人が、お酒も程ほどに飲みながら、私語もほとんどなく人の話に盛り上がってすごせたこと、それもまた小さな奇跡に思えたと、スタッフの一人が後で語っていました。

「僕の友人は絵が好きだったけれど、芸大生ではなかったから無言館にはいない、ここにもエリートとそうでない人の差はやっぱりある」と、話された方がいました。無言館ツアーは、絵や手紙はもちろん、生きた証である名前すら残せず殺されていった多くの人たちにも思いを馳せる旅となりました。

（あべ・めぐみ、本誌編集委員）

（写真撮影　大木晴子）

夕食と懇親会は大広間にて、車座で

■『戦没画学生慰霊美術館・無言館』

長野県上田市古安曽3462

電　話　0268・37・1650

開館時間　9：00～17：00

（7、8月は18：00まで）

休館日　7～11月は無休、12～6月は火曜日

（火曜祝日の場合は翌日）

無言館を訪ねる旅・参加者アンケートから

思い浮かべた出征風景

愛知県豊橋市　四谷　勲

昭和19年学徒動員で多くの学生が出征した。私はその時国民学校1年生でそんなことは何も知らない。東京蒲田に住んでいたが、その年の暮れに疎開で父の郷里石川県へ逃れている。だから（昭和）20年3月の東京大空襲も知らない。疎開せず残っていたら多分焼死していただろうと思う。19年のその頃どこかで一人の学生が自宅で熱心に絵を描いている。彼には赤紙が来ている。父と母が横でそれを見ている。外では大勢の人が集まり、「祝○○君出征」のノボリが立ち、また「勝ってくるぞと勇ましく誓って国を出たからは……」と歌っている。父は「もういいだろう。筆を置いて。」と言う。母は黙って泣いている。……1枚の絵の前に立った時、そして小さな説明文を読んだ時、そんな風景を思った。本当にそうだったかは分からないが。すると涙が出てきた。今日は来てよかった。

予定調和でない市民運動の姿

東京都文京区　金井　佳子

お世話をして下さった吉田さん、大木さん、本当にありがとうございました。佐橋さん、本当にご苦労様でした。

皆、それぞれ生き方の問いを自分に向けていて、だからそれぞれの熱い思いが、終わりになるほど、ほとばしってきたようで、予定調和ではない、市民運動の、いい姿だと思いました。多分、対話の余りの部分は、自分の中に加えられて、又深くなるのではないか、と思っております。無言館はそれだけの大きさがあります。こういう機会を又つくって下さい。

若く死んでいった不合理

東京都府中市　若木　京子

私は、意見広告に参加したり、『市民の意見』を送ってもらったりしていますが、事務所等にいったことはなく、知っている人もいないので、すこし不安でしたが、「無言館」と「別所温泉」にいきたいと思っていましたので、思いきって申し込みました。無言館は思っていたより立派な建物で、破損のすすんでいるキャンバスも大事に展示され、添えられたことばが、若くて死んでいった人の不合理をきわだたせていました。こういう場所を戦争に反対する人達と一緒にみることができて、本当によかったと思います。部屋でも十分くつろげていい旅行でした。ありがとうございました。

参加して本当に良かった

神奈川県横浜市　堀切　文子

――懐かしい子供の頃を想い出す別所温泉の田園風景、小高い丘の松林の中に建つ無言館と周辺の佇まい。これから花開くであろう画学生の素朴な絵の数々。そして、個性豊かな参加者の方々との出会い――。

そのすべてが、私にとっては〝素晴らしい〟の一言でした。今は、友人の言葉に押されて、勇気を出して参加して本当に良かったと思っています。これからは毎日の生活の中で、自分にできる事を、半歩でも前進させながらやって行こうと思っています。

深く心に刻む旅

東京都多摩市　中野　欣子

初めて無言館を訪ねた時の感動から、ぜひもう一度と、ずっと願っておりました。このツアーに参加出来て、第2館の新たな展示作品も拝見でき、大満足です。帰りのバスで、ここに作品を提供しておられるご遺族の方にお会いするというハプニングもあり、深く心に刻む旅となりました。夜のミーティングでの「良識ある上等の人々」のお話のかずかず、味わい深いものがありました。青空の広がる6月の塩田平、すば

らしかったです。親しくしていただいた同室の方に従いお寺も3カ所廻りました。このような旅を企画し、当日ゆき届いたお世話をして下さった係の方々に、心からお礼を申し上げます。

国家権力に犬死させられた彼ら

（無記名）

24歳で1945年4月に戦病死した叔父と、無言館の画学生たちが重なる。生きて仕事をし、画を描きたかった未来を断ち切られた苦しみ。彼らは国家権力によって犬死させられたのだ。

又、一方では、「アメリカばんざい」でも見たように、戦う道具になるよう思考力を徹底的に奪われた青年たちが、どんな兵士にされて、戦場で何をしたかを思わずにはいられない。戦争をする国家はいらない。そのためには国民が国家の上に立たなくては。そのためには教育に国家が口出しするべからず。出すのはお金だけに願いたい。つまり、国家は国民に奉仕するという役割のためだけに存在すべきものと改めて思う。

せつない思いで一杯に

東京都大田区　加藤　八重子

透明な若葉の美しい山道を登った丘の上に「無言館」はありました。学徒出陣によって若くして逝った美大生の絵は、保存状態もわるく絵の具がはげ落ちてしまっていたりします。しかし、迫力のある、エネルギーあふれる絵画からは、真剣に絵を学んで、将来を託していた学生達の真摯な気持ちが伝わってきて、何ともせつない、やりきれない思いで一杯になりました。

もう1時間欲しかった

東京都大田区　岡安　英治

毎号のニュース表紙を飾っている無言館からの絵。無言館へ行きたいなぁとずっと思っていた。30の会の皆さんと訪れることが出来た。絵を見てまわるだけなら一般の美術館と変わらない。が、その説明（解説）を読むと、その絵に込められた思い、また作者、家族、友人に考えが及ぶと胸がしめつけられるようだった。無言館、内容にふさわしい名称ですが、実は無数の無念がつまった無言館なのだ、と思った。

もう1時間欲しかった。季節を変えて、また30の会で来たいなぁと思った。

なつかしいニュース表紙の絵

東京都北区　乾　喜美子

結論から言ってとても良かったです。

はじめツアーの話を聞いたとき、無言館には行きたいけれど、団体行動？知らない人と泊まるの？懇親会があるんだ！とちょっとためらいました。でもこんなチャンスでもないとなかなか行けないかも知れないと締め切りぎりぎりに思い切って申し込みました。

無言館ではニュースの表紙の絵に対面してなにやらなつかしい感じがしたし、才能ある若い青年達が戦争の犠牲になったこと悲しく思いました。これからも微力ながら反戦のために出来ることをしなくてはと思います。

同室になった方達ともすぐに打ち解け、お互いマイペースで無理なく過ごせました。

心配していた懇親会も発言を強要されることなく話したい人が話すと言う感じでリラックスして聞けました。色々な地域の方にお会い出来、それぞれ活躍されていることがわかって良かったです。（後略）

窪島氏の志と努力に脱帽

神奈川県横浜市　野澤　信一

ほの暗い無言館の中央でぼくは画学生の声に耳を傾けようとして暫く立ちつくしていました。国家によって心ならずも殺されていった彼らに対して、ぼくたちがすべきこと、できることは何なのだろうか。そればかりを考えていました。そして今更ながら事実を事実として伝えていこうとする窪島氏の志と努力に頭が下がる想いでした。そのメッセージ性の大きさは無言館の碑に赤ペンキをぬるといういやがらせを受けたという事実が雄弁に物語っています。人に伝えることが画学生とつながるすべと思いました。

読者のおたより

◆教科書に日本軍の犯罪を

埼玉県さいたま市　匿名希望

中国での日本軍の犯罪の事実の本（資料）を最近読み教科書にきちんと載せて2度と行なわない予防をするべきだと考えています。暑さに向かいます。ご大切になさいませ。

◆「まだまだがんばる」

大分県中津市　田渕英久

吉川勇一さんのフンバリを見ると、「まだまだガンバラないと」と勇気づけられます。いつもありがとうございます。

◆学童疎開を引率して

東京都北区　岩瀬房子

今月86歳になりました。戦中は学童疎開の引率教師として長野県戸倉温泉で大変な思いをしました。70歳を過ぎた教え子と共に語り部、9条の会などといろいろしてます。老いてまともな字も書けず御ゆるしください。

◆自分がよければ・・？

東京都あきるの市　南里昌子

人間不在の国、日本。何事にも無関心な人間を作り出す。自分さえよければ・・・その心が戦争を生み出すのでは！！

◆横浜事件は二度と起ってはならない

兵庫県伊丹市　田中　翠

いつも勉強になります。横浜事件の事、よく理解できました。ひどい時代でした。二度と起ってはならないと思いました。

◆定額給付金をカンパへ

東京都大田区　笠原乾吉

自民党公明党ができるだけ嫌がる形で定額給付金を使いたいもの。少しですがカンパします。

◆チラシは情報の窓口

愛知県名古屋市　山口光子

いつも同封して下さる各種チラシが情報の窓口となりうれしいです。〝定額給付金を社会連帯に〟はこれこそ願っていたものと早速手続きをしました。

◆巻頭詩を読んでいます

埼玉県さいたま市　渡辺泰子

巻頭詩で名前を覚えた石川逸子さんが高校の同窓会紙に文を寄せていてびっくりしました。巻頭詩を知らず知らずの内に読んでいるものですね。

◆憲法9条の堅持と実質化を

香川県高松市　田中暉彦

憲法9条の堅持、実質化にしか平和実現の確実な、そして唯一の手段であり道であることをどれだけ多くの国民が自分の思想、信念として確立していくかが今日も明日も問われ、突きつけられていると確信します。

◆MOX燃料が搬入されました

愛媛県松山市　新山一男

5月27日、伊方原発にもMOX燃料が搬入されました。さらに「プルサーマル」反対の運動を続けます。日本の国策は恐ろしい。

◆小学生の母です

滋賀県大津市　岸野美奈子

小学生の子供を持つ母です。子供達が生きる未来の世界が平和である事を祈ります。

◆軍隊がいない島には集団死はない

福岡県田川市　山下　弘

沖縄戦1フィート運動の「軍隊がいた島」を観ました。次々と強制集団死が起こる中で最後に軍隊がいなかった島が紹介されました。そこには集団死はありませんでした。

◆うそを見抜く目を

東京都西東京市　鈴木美紀

市民の意見ニュースは日々ぼんやりと過している私に「ウソを見ぬく目」を与えてくれます。無言館では、多くの前途ある芸術家を失ったことが悲しい。

◆81歳、じっとしておれない

愛知県名古屋市　山田茂里夫

81歳の6月。いろいろ故障が増えてきましたが、じっとしておれない事が多く診療

所通い（週2日）点滴の時間が唯一の休息の刻といった感じです。海外派兵、軍事費、国民の税金の無駄使いを止めなければ。

◆名前が載りうれしい

東京都練馬区　草場　純

5月3日、名前が載ってうれしいです。次もぜひ載せてください。苦労は多いと思いますが人類の未来の為に頑張って下さい。

◆都道府県別で氏名の掲載は

福岡県前原市　芳井伸明

新聞意見広告お疲れ様でした。一つの提案ですが，氏名を都道府県別に出来ませんか。府県名をゴジックでいれ、その後に名前を並べるのは如何ですか。私も福岡で一度取り組んだ事があるので新聞を見た人が知人を探しやすいようにと思いました。

◆辻つまの合わぬもの

秋田県鹿角市　武石佳久

会費切れにも拘わらず、意見広告には送金したり、老齢（84歳）とはかくも辻つまの合わぬものです。申し訳ありません。

◆対米従属、思考停止か

兵庫県宝塚市　坂井　秀

北朝鮮ロケット発射をめぐる政府、自衛隊の対応、それを報道するマスコミの大騒ぎが情けない。対米従属・思考停止からの脱却、イラク派兵の総括が日本政府として必要。

◆草の根の民主主義を

愛知県豊橋市　辻　妙子

「9条・25条の実現を」意見広告事務局から送られ、初めて貴誌を拝見。東京で草の根民主主義を支えようという雅量を頼もしく読ませて頂きました。

◆せい一杯の自助努力

東京都小金井市　和賀君子

北朝鮮で出生。ソウルからの引き揚げ者。敗戦時、軍属でした。亡夫は軍人。戦前の教育、やむなく働き、生きてきた。戦中、戦後も戦いでした。今の日本、希望がもてない。政治、教育、倫理観等、まともになってほしいと願いながら僅かの年金で自助努力でせい一杯の85歳です。

◆緑色の意見広告はすばらしい

北海道江別市　徳田日出彦

今年の緑色の意見広告はすばらしかったと思います。現憲法に誇りを持ち、不動のものにするために今後も継続していくことがぜったいに必要だと確信します。微力ですが支援を続けていきます。

◆無防備国家へ

岐阜県高山市　白木　晃

第9条を守り世界の各国が軍事費を撤廃し無防備国家になったら世界から飢餓はなくなるだろう。

◆殺されても殺しません

香川県三豊市　大喜多一淑

殺されても殺しません。9条を守りましょう。あの世行きが間近い年寄りです。

◆君が代でなく「おめでとう」の言葉を

大阪府高槻市　野口里子

超低体重で生まれた孫が今春地方の幼稚園に入園した。私たち祖父母も孫の成長を祝って入園式に出席した。「起立、国家斉唱、教育長告辞、教育課長祝辞……」この現実に衝撃を受けた。園児たちには第一声が君が代でなく、おめでとうの言葉をかけて欲しかった。守ろう9条。

◆じっくり読みます

東京都西東京市　梶原史朗

当年、77歳、シルバー会員にお願いします。記事の内容の重さのゆえに、テーブルの上に置いておいて家内ともどもじっくりと読ませて頂いております。

「読者のおたより」の多くは、会費納入の際の郵便振替票に書かれているメッセージを使わせていただいています。掲載について匿名をご希望の方は、その旨明記していただけると幸いです。

Information

☆【長崎】8月1日（土）～9日（日）ピースウイーク2009 in NAGASAKI ●7日＝元京大講師、小林圭二講演会「"プルサーマル"行き着く先は…？」（午後2時、県教育文化会館） ●8日＝端島・高島ピースクルーズ（午後1時半出発）、在韓被爆者らによる「被爆体験を語り継ぐ会」（午後6時半から県教育文化会館） ●9日＝ピースウイーク2009市民集会（午前10時から爆心地公園）ほか。 ●問い合わせは同実行委（電話・FAX：095-822-4098）

☆【広島】8月5日（水）8・6ヒロシマ平和へのつどい2009 18:00～20:30 第1部：広島・長崎からの発言／在外被爆者の支援をなど 第2部：2010年NPTに向けて反核運動の高揚を！海外ゲスト・ピーター・カズニック ●会場：広島市まちづくり市民交流プラザ北棟・研修室ABC（広島市中区袋町6-36）参加費:1000円（学生など半額） ●主催：8・6ヒロシマ平和へのつどい2009実行委 ●同事務局（電話：090-4740-4608／FAX：082-297-7145）

☆【東京】8月7日（金）2009平和の灯を！ヤスクニの闇へ キャンドル行動 18:30～20:30（開場・18:00）国際シンポジウム「東アジアからヤスクニを見る」報告『ノー ハプサ！ 勝手に合祀』南相九（韓国）『沖縄戦 2歳の子どもが英霊？』石原昌家（沖縄『台湾原住民がなぜ靖国に』高金素梅（台湾『戦死者の追悼－その日独比較』など 場所：日本弁護士会館クレオ2F（地下鉄・霞ヶ関駅下車B1-b出口 徒歩1分）／8月8日（土）14:00～18:00（開場：13:30） ●コンサート＆証言：出演 飛魚雲豹音楽工団（台湾）、権海孝、孫炳輝など 証言／韓国・台湾・沖縄・日本の遺族等 会場：上野公園水上音楽堂 コンサート終了後、 ●キャンドル・デモ19:00から 上野公園→秋葉原（予定） ● 連絡先：四谷総合法律事務所（電話・FAX:03-3355-2841）

☆【東京】8月13日（木）～15日（土）わだつみ会 8・15集会2009 会場：江戸東京博物館ホール（03-3624-9974)JR総武線・地下鉄両国駅下車3分 ●13日（木）～14日（金）10:30～ わだつみのこえ記念館所蔵映像資料の上映／資料代300円 ●15日（土）13:30～講演会「今もつづく戦争」①「空襲の二都物語――重慶と東京」石島紀之（フェリス女学院大教授)②「変わる自衛隊――とどめない日米一体化」半田滋（東京新聞編集委員） ●戦没学生遺稿・遺品・戦没画学生遺作の展示／参加費一般1000円 70歳以上800円 学生700円

☆【東京】8月17日（月）～18日（火）非戦を選ぶ演劇人の会ピースリーディングvol.12 ●開場18:30 開演19:00 ●場所：全労済ホール（03-3375-8741） ●料金（全席指定）：一般1500円、中高生1000円、小学生以下500円 問い合わせ先：青年劇場（03-3352-6922） ●主催：非戦を選ぶ演劇人の会

☆【東京】8月12日（水）～16日（日）平和のための戦争展2009 場所：スペース・ゼロ（JR新宿駅南口5分、全労済会館B1） ●30周年記念企画 8月14日（金）講演「なぜ加害体験を聴くのか」高橋哲哉（東京大学大学院教授）14時～ 場所：カタログハウス地下ホール 資料代500円、定員150名（先着順）場所、時間は15,16日も同じ ●8月15日（土）講演「憲法を私たちの力にするために――8月15日に考える」小森陽一（9条の会事務局長） ●8月16日（日）講演「『反 貧困』から平和へ」湯浅誠（NPO法人自立生活サポートセンター・もやい事務局長）※平和のための戦争展実行委事務局（日中友好協会東京都連合会、03・3261・0433）

☆【東京】8月15日（土）9：45～憲法を活かして平和を創ろう8・15集会 ●日本教育会館7F会議室（地下鉄神保町・竹橋駅下車、03-3230-2833） ●特別講演「田母神問題と歴史修正主義」吉田裕（一橋大学院教授）ほか ●参加費500円 ●正午から戦没者遺族と共に靖国神社周辺を平和行進 ●主催：平和遺族会全国連絡会

☆【東京】8月28日（金）『8・28都教委包囲アクション』15:00～18:00 ●場所・都庁第2庁舎2階玄関前歩道 主催：都教委包囲首都圏ネットワーク（090-5415-9194）

☆【東京】9月12日（土）派兵国家の20年を問う／『派兵チェック』総括集会 18：00～21：00 文京市民センター3C会議室●報告：太田昌国 木元茂夫 池田五律 ●資料代800円 ●主催 派兵チェック編集委員会、fax:03-5275-5989

事務局だより

無言館行き、脳梗塞など

吉川勇一

■6月の無言館見学ツアーは、別掲のページにありますように、参加した人びとは強い感動を受けて帰ってこられたようです。私も参加希望でしたが、後に書きますように、病気で入院になり、残念ながらゆけませんでした。

■参加した一人、会員の鈴木美紀さんは、私と同じ町におり、「木々」という、仲間がよく集まるファミリー・レストランを開いています。入口には「九条実現」の大きなポスターが貼られ、中には「殺すな」のバッジやシールも売られています。私は、退院した後、「木々」で昼ランチを食べながら、無言館ツアーの報告を聞いていたのですが、そこで聞いた話に驚きました。鈴木さんの伯父さん（86歳になる父君の兄さん）は、戦争中、芸大の学生でビルマに送られ、別紙のはがきを送ってきたのを最後に戦死していたそうです。すっかり茶色に変わっていたはがきを見せていただきました。「生死ただ天のみぞ知る雲の峯」という句も入っていました。このはがきも、やはり無言館にお送りしたら、とお奨めしました。その弟にあたるもうひとりの叔父さんも、実は特攻隊員だったそうで、出撃の直前に敗戦、ぎりぎりで死なずに済んだという話もありました。「戦争は、人びとから愛する人も夢も希望も才能もすべて人の心さえも奪い取ってしまうのですね。がんばれ、憲法九条です。」鈴木さんはそう言うのでした。

■本誌4月号の「事務局だより」で、『戦争の放棄・交響曲第9条』の報告を載せました。『週刊金曜日』5月1日号にも詳しい報道が出ていました（宮本有紀「戦争の放棄」）。500円で頒布されています。注文はFAX-03-3356-9932に連絡を。東京新宿区四谷4-23第一富士川ビル302号『戦争の放棄』CD委員会です。ベートーベン交響曲9番の4楽章のメロディに憲法9条の条文が歌われるものですが、英語やエスペラント語の独唱、三線の演奏、オカリナの演奏、ロック調などまでが入っています。エスペラントは、本会事務局の佐橋弥生さんの独唱です。

■6月末、意見広告市民運動の事務局では、意見広告のレイアウトを作って下さった鈴木一誌さんと村上和さんを中心に、ビールや焼酎も入った親しい懇親会が行なわれました。これで意見広告運動の今期の活動は終わり、来年へ向けての新たな活動が開始されることになります。事務局スタッフへの新しいボランティアに、多数の方がおいでくださることを希望しております。ご連絡をお待ちしております。

■最後に、私的で申し訳ないのですが、私、6月の初めに、なんと脳梗塞の症状となり、救急車で入院ということになりました。歩行や手足の動きは不自由ではないのですが、言語の理解や表現を伝えることがうまく言えず、言葉が出ることがかなり難しくなっています。この「事務局だより」も、何とか書いてみたのですが、これまでの執筆の3～4倍も時間が必要となり、それでも文をうまくまとめられなくなっています。前号で「老後も進化する脳」の話を書いていたのでしたが、まさに「精神の若さを保つ」努力を自らやってみなければなりません。今、退院は出来ていますが、毎週リハビリを続けています。最初、リハビリは週3回あったのですが、今は週1回です。少なくていいのではなく、厚生労働省の健保の適用を削る政策のせいなのです。憲法9条とともに25条の危ういことが、自分に迫ってきている状況です。

■うまく出来ない文章、お許し下さい。

（よしかわ・ゆういち、事務局、本誌編集委員）

編集後記

◆巻頭詩を選ぶのは、各号の編集者にとって楽しくもあり、苦しくもある仕事です。さまざまな意味で選ぶ側が験されている感があるからです。今号の山之口貘『鼻のある結論』を読んで、これのどこが反戦平和と関連があるのか、と思われた方もおられるかも知れません。勿論、そういう解釈も自由でしょうが、私には、詩が書かれた1937（昭和12）年、世界が戦争へと突き進む中で、詩人がとった姿勢は充分に反時代（反戦）的だったと思われます。

◆本号では、ピープルズ・プラン研究所の論客武藤一羊さんにお願いして、総選挙を前に内外の情勢を分析してもらいました。もしかすると戦後64年で最大の分岐点に、私たちは立っているのかも知れません。既成政党に幻想を抱くことなく、市民運動はあらゆる知恵と力を振り絞るときでしょう。

◆いつの時代でも、若者が年輩者の説教を嫌うことには合理性があります。しかし、その若者はどのように歴史を学ぶのか、あるいは学ばないのか。若者の活字離れが進行する先には、何があるのか。今回の特集は、こうした老世代の疑問から生まれました。更なる議論を期待します（本野義雄）。

☆編集委員　天野恵一、阿部めぐみ、有馬保彦、岡安英治、佐橋弥生、杉内蘭子、高橋武智、高岡甫雅、西田和子、野澤信一、古澤宣慶、道場親信、本野義雄（本号担当）、諸橋泰樹、吉川勇一、吉田和雄（次号担当）

会計報告

ようやく雨傘を日傘に持ち替えるこの季節、「外出気分は上々！」のはずが、都会の通勤電車はクーラー冷え冷えで体調を崩される方も多いようです。エコはどこへいってしまったのでしょう？

さて、今期会計は前期とは打って変わってホンの少しの赤字ですみました。と言っても、収入と支出を比べて支出の方が少しばかり多かったというだけのことで、前期より会の基本会計そのものは黒字となっていますので、どうぞご安心ください。

これもひとえに、会員の皆様に引続きご継続いただいたことや、定額給付金などからのカンパによるご協力のたまものであり、また、新規に入会された方がいつになく増えたおかげです。ありがとうございました。

この夏も、皆様のニュースに寄せる期待の大きさを感じつつ、風の通る事務所で汗を拭き拭き日常作業に勤しんでいます（K）。

市民の意見30の会・東京 2009年5月～6月会計

1. 収入	
一般会費	459,000
協力会費	223,000
敬老会費	374,000
障害者会費	21,000
（会費小計）	1,077,000
カンパ	322,900
ニュース販売	2,000
バッジ等販売	6,640
集会入場料	6,500
雑収入（*1）	61,200
預り金（*2）	192,000
立替金精算（*3）	411,351
収入計	2,079,591
2. 支出	
印刷費	0
発送費（*4）	150,150
通信費	33,182
事務用品費	846
消耗品費	25,300
編集費（*5）	22,302
会場費	4,000
交通費	90,540
事務所費（*6）	115,195
光熱費	8,242
手数料	60,925
諸会費（*7）	57,000
雑費（*8）	20,578
立替金（*9）	1,134,499
預り金精算（*10）	697,500
支出計	2,420,259
3. 収支	**-340,668**
前期からの繰越	7,547,341
次期への繰越	7,206,673
4. 残高の内訳	
会基本会計	4,139,437
条約基金	176,715
F/I基金	2,665,820
預り金	224,701
計	7,206,673

注（*1）無言館ツアーア参加費預り金他。（*2）意見広告賛同金預り。（*3）意見広告家賃他、立替金￥200,000回収。（*4）ニュース113号の発送費。（*5）読者懇談会講師謝礼￥10,000、プロジェクター使用料￥6,000他。（*6）事務所家賃6～7月分￥110,000、損害保険￥5,195。（*7）無言館へ寄付（F/I基金より支出）￥50,000、九条の会・ヒロシマ賛同金￥4,000他。（*8）無言館ツアーカンパ金支出￥20,000、コピー代等。（*9）意見広告事務所費、損害保険料、光熱費等￥134,499、意見広告へ立替￥1,000,000。（*10）無言館ツアー参加費預り分精算、意見広告賛同金精算。今期会計には、ニュース114号の印刷費が含まれておりませんので、次期会計に繰り越します。